



おそたのきをさなき時よりくさくのうた
をかきあつめうたよむるよりよなさま



のくつもをまかく一まきと
ひめたむむよをいせよたはやけ
なひのたをけよなさまほと友
かまよよぬなふねのいなみかた
おとつ

明治廿六年九月

編者 じる 是

をその夕くれ 三十八
 あとの夕くれ 三十九
 雨の夕くれ 同
 野への夕くれ 同
 もこき夕くれ 同
 春の夕くれ 同
 夕くれの空 四十
 ゆくすゑの空 四十三
 春のあけほの 同
 雪のあけほの 四十六
 露のあけほの 同
 明日のあけほの 同
 けさのあけほの 同
 うちのあけほの 同
 明はのくそら 四十七

峯の志ら雲 四十八
 めるる志ら雲 五十二
 見ゆる志ら雲 五十三
 あとの志ら雲 同
 花の志ら雲 同
 きゆる志ら雲 五十四
 末の志ら雲 同
 めるる志ら雲 同
 そらのうき雲 五十五
 よそのうき雲 同
 鶯の志ら 五十六
 鶯のなく 五十九
 鶯そなく 六十二
 鶯なくも 同
 さほまかの志ら 六十三

さを鹿鳴も 六十五
 鹿そ鳴なる 同
 鹿の鳴なる 六十七
 鹿も鳴なり 同
 を鹿鳴なり 六十八
 鹿の鳴なり 同
 鹿の鳴らん 同
 鹿も鳴らん 六十九
 鹿や鳴らん 同
 鹿の立らん 七十
 鹿の見るらん 同
 鹿のねもせそ 同
 鹿にのあらねと 同
 鹿のこゑせぬ 同
 鹿のこゑあな 七十一

秋の初風 七十一
 秋の風ふく 七十五
 秋風のふく 同
 秋風そふく 七十六
 秋風のふく 八十
 にはの秋風 八十一
 野への秋風 同
 見たる秋風 八十二
 千枝の秋風 同
 やとの秋風 同
 たの秋の風 同
 み糸の秋風 同
 めるる秋風 八十三
 よはの秋風 同
 よもの秋風 同

霞のな 百三十二
 かむむ春のな 百三十三
 春ののそみを 同
 けさそのそめる 同
 のすまさりけり 百三十四
 のすみへたてつ 同
 けさののすみの 同
 霞とおもへり 同
 のそみなるらん 百三十五
 はへ 同
 はた 百三十六
 はもとの外ののな 百三十七
 よほひと香 同
 二句同素とをいれたる 百三十八
 三句切れたる 百三十九

へき 百四十一
 どや 百四十二
 ぬるのな 同
 ぬらん 百四十三
 じふ 百四十四
 かつ 同
 かと 同
 かとも 百四十五
 かるも 百四十六
 かなし 同
 上の句より受て下へ續きたる 百四十七
 たらちめ 同
 つるのな 百四十八
 つるのも 百四十九
 つくくと 百五十三

な 百五十三
 なほさりよ 百五十八
 なるのな 百五十九
 なるく 百六十
 詠る 百六十一
 なつさのまゑ 百六十二
 なまに 百六十三
 うちつけに 同
 うたかた 同
 うたて 百六十四
 うまろめたき 同
 のとくまりたる 百六十五
 同素とを二つぬれたる 同
 や 百七十三
 やかて 百七十四

やさゑ 百七十六
 まとひまとお 百七十七
 まよふ 百七十八
 まくりて 百七十九
 けりとかな 百八十
 けりとかな 百八十一
 けりな 同
 けらしな 百八十二
 けるかな 同
 けるかも 百八十五
 こちかひする 百八十八
 こちのみする 同
 こちこそせね 百八十九
 こちこそせめ 百九十

まよて二處切れたる 二百

字音の歌 同

ものを 二百一

もや 二百二

もまほくさ 二百四

もこまき 二百五

もさめぬ 二百六

てけり 百九十

てける 百九十一

あへぬ 同

あへそ 百九十二

あまり 同

さりとち 百九十三

さるらん 百九十四

さらぬたに 百九十五

さらなん 同

さらん 百九十六

さもまそは 同

きや 百九十七

弓張の月 百九十八

み 同

見ゆ 百九十九

歌格類聚

後拾一

たつのすい澤への 蘆のしたねとけけつもぬいつる春の來にけり

同 穂にいてし秋とみままよを山田を又うちあへそ春の來にけり

同 どの宿の梢はかりと見しほとにまものやまへに春の來にけり

同 新 みる島江につのくみとたる蘆の根の一夜はありに春の來にけり

雪ふかき岩のあけ道あたとたゆるましのとさとも春の來にけり

かきくらし猶ふる里の雪のうちに跡こそ見ぬね春の來にけり

同 風ませに雪のふりつとまのすかにをそみたな引春の來にけり
 同 みをしのと山もあすみて白雪のふりにしさとに春の來にけり
 勅 ほかにも軒はの梅の匂ふおなどなりをしめて春の來にけり
 月 かきくもりまたまら雪のふる年に春とは見えて春の來にけり
 代 朝かそみたてるを見れば水の江のましのと宮に春の來にけり
 同 あをよよしならの都の玉やなきゆゆにもしるく春の來にけり
 月 今朝見ればかそみの衣かりおけてまつはた山に春の來にけり
 六帖一

このふるの梅の花なり冬なからきみかにはほひに春の來にけり

○

拾一 野へ見れは若なつみけりうへしこそ垣根の草も春めたにけり
 同十七 さむらひや下にもゆらむ霜のれの野原のけふり春めたにけり
 詞 きのおかも霞ふりしかまらきのと山のかすみ春めたにけり
 同 もねはつる草葉のみかのをさと原駒のけしきも春めたにけり
 新 みとまのと大河野へのふかやなき影まそ見ね糸春めたにけり
 勅 雪きぬてうらめつらしき初草のはつかに野へも春めたにけり
 續

代

みかりのにまたふる雪の消ねともきくすの聲の春めたにけり

同

かりの糸のなきにし日より山里のかきねの草も春めたにけり

同

郷人も更かなつむらし朝日さそみかきの野へは春めたにけり

同

うくひすのなきにし日より山里の雪まのくさも春めたにけり

金

久方の雪まのかく山てらす日のけしきもけふを春めたにける

同

つらくぬしほそ谷川のどけゆけはみなかみよりや春の立らん

いつしかとゆけゆく空のかきめるは天の戸よりや春は立らん

新十六

としくれま涙のつらくとけにけりこけの袖にも春やたつらん

後拾

雪ふりてみぢふみまよふ山里にいかにしりて春のきつらむ

同

あつまちは名こそその關と思志を以かて春のこえてきつらむ

勅

天の戸のほくるけしきもしつかにて雲ぬよりこそ春は立けれ

新

我やどのそとも立るならのはのしけみに涼む夏はたにけり

六帖一上

代 花鳥もみなゆきおひてうは玉のまにけふの夏のたにけり

ゆなみのとむらくみえし柏木の廣葉になれる夏のたにけり

六帖一上

ゆけくれるつきひのあれと郭公なくてゑにまそ夏のたにけれ

千

秋のうち哀れまらせし風の音の烈しさそふる冬の來にけり

拾四

ゆしのはに隠れて往來津の國のこやもあらはに冬の來にけり

代

やまのつのももきお垣も霜かれて風もたまらぬ冬の來にけり

同

大あらきの杜のもみち葉ちりはてと山淋あふる冬の來にけり

同

秋のゆぬかせよ木の葉のちりはてと山淋あふる冬の來にけり

同

もみちはのふりかくしてま我宿に道もまかはそ冬の來にけり

同

さひしさのつま木こりつむ宿なれは我爲とてや冬のきぬらむ

新

おきあかさあきのとわれの袖の露霜まそむそへ冬やきぬらむ

古又六帖

木の間をりもりくる月のあけみれは心つくしの秋の來にけり

後三

ゆしひきの山の山より守る山ももみちせさする秋の來にけり

拾三

八重もくら茂れるやとの淋まさに人あそみねね秋の來にけり
拾七万十

にはくさに村雨ふりてひくらしのなく聲きけは秋の來にけり
後拾

淺茅原たまよく葛のうらうせようらうなしかる秋の來にけり
新四

神なひのみひろのやまの葛かつら下ふきうへす秋の來にけり
同

昨日たにはんとおもひし津の國の生田の杜に秋の來にけり
同

ふか草の露のとすかをちきりにて里をはかれそ秋の來にけり
同

ふくろせの色こそ見ね高砂のをのへのまつに秋の來にけり
同

ゆはれまたいかにしのはむ袖の露野原のかせに秋の來にけり
代

ふくろせよ下葉かつちる青柳のうつらきやまに秋の來にけり
代

月かけもおもひあらはともりそめて替のやどに秋の來にけり
新四

みしふつき植ま山田にひたぬれてまた袖ぬらす秋の來にけり
代

をかのへの一村そと穂穂に出てま糸くを見れば秋の來にけり
勅

白露のかりたす萩のまともみちころもにうつる秋の來にけり
同

眞葛原うらみぬ袖のうへまでもつゆおきそむる秋の來にけり
同

天つ風そらふきまふたくれのくものけまに秋の來にけり

續

松の糸に岩もる清水むそ夜は君の身ひとつの秋の來にけり

金

山ふかみとふ人もなき宿なれとそものを田に秋の來にけり

勅

あゝ海なき草のたもとも花さゝけ露はまほへぬ秋の來にけり

代六帖六

ゆつもふく物とりきけと萩の葉のそまゝ成よそ秋の來にける

古四

川風のすゝまくもあるうらちよする浪とこもにや秋は立らむ

代

うたと糸の寒くもあるかなうら衣そでのうらにや秋の立らむ

古四

君のそてにまたき時雨のふりぬれは君のまゝ海に秋や立らむ

後二

春の日のなかきおもひを君のまゝ海に秋や立らむ

後拾三

はともなく夏のすゝまくなりぬる人になられて秋や立らむ

勅

あまひきの山下風のゆつたまにおとふきかへて秋のたぬらむ

金

みそきするみきはの風の涼しさに一夜をこめて秋やたぬらむ

新一

同 そらはなほすみもやらそ風さねて雪けにくもる春の夜の月

同 梅のはなほかぬ色香もむかえにておなしかたみの春の夜の月

同 大そらは梅のにはひにかすみつとくもりもはてぬ春の夜の月

同十六 あさみとりはなもひとつに霞つゝおほ汐に見ゆる春の夜の月

同十六 しら涙のてゆらんすゑのまつやまの花とやみゆる春の夜の月

六帖 おほつかなうそみたつらむ竹くまの松のくまもる春の夜の月

千 ぼれたれは影もかくれぬ我やとのにはのどかなる春の夜の月

にはひもてまかはそまらん梅の花それとも見えぬ春の夜の月

勅

代 梅か香も身にしむころのむかしにて人こそほら糸春の夜の月

花ちらねおたつとも見むつねよりもさやかに照そ春の夜の月

後拾三

何をかひほくる志るじとおもふへき晝もかはらぬ夏の夜の月

金

たまくしけ二上やまの木の間にいつれにあくる夏の夜の月

代

天の戸をあくるもしらて詠めつとみれともあかぬ夏の夜の月

同

なうくに曇はてなは糸ぬへきをとたぐてらそ夏の夜の月

同

あきとりもほらぬ心そまさりける見るほどもなき夏の夜の月

同

さやかにもみてをあかさん木隠てすきうてにぞる夏の夜の月

○

拾四六帖一

あまのはらそらさへさえや渡るらむ氷るとみゆる冬の夜の月

後拾六帖

山のはり名のみなりけりみる人のまゝ海にそゆる冬の夜の月

新古

我がどのより田のおもにふそまれの床あらはなる冬の夜の月

代

その神をおもひそゆる山あわのそてにもなれま冬の夜の月

同

あまのかはさねたる空を見渡せばこほりをなす冬の夜の月

同

とまをへてあしらよつもる白雪のうけはつかし冬の夜の月

○

古四

白雲には縁うちかひしとふかりのあすさへみゆる秋の夜の月

拾三

飽すのみおもほへんをはゆるとせんかく社のみめ秋の夜の月

同十六

はるあなる旅の空にもおくれぬうらやままれの秋の夜の月

同十七

もとしきの大みやなから八十島をゆるまをさる秋の夜の月

後拾四

あそきつと見れまそたつれ山郷にゆるまりすめる秋の夜の月

同

にこりなく千代をかそへてすむみつに光をそふる秋の夜の月

同

すたきけんむあまの人のなき宿にたかかけする秋の夜の月

同 同 同 同 金 同 同 同 同

とふ人もくるれはかへる山さともにもろともにもすむ秋の夜の月
さむどてもいく世もあらまゝの中の曇りあなる秋の夜の月
うたまよ厭ひし身こそ惜まるれあれはそ見ける秋の夜の月
何をかひあくるまゝと思ふへきてりもあはらぬ秋の夜の月
すみのほるまゝあや空をはらふらむ雲のちりぬ秋の夜の月
もろともに草葉のつゆのおたぬすは一人やみまゝ秋の夜の月
三笠山ひかりをさしていつるよりくもらてあけぬ秋の夜の月

同 詞 同 同 同 千 同 同 同

さらぬたに玉にまゐひてかく露をぬとくみあける秋の夜の月
なかむれに戀しきひとの戀まきにくもらぬくもれ秋の夜の月
いにしへをこふる泪にくらされておほろにみゆる秋の夜の月
ありにしもあらしをなりゆく世の中にあらぬ物に秋の夜の月
あまつ風そらふきはらふ高祢にてぬるまでみつる秋の夜の月
木船川たまちる瀬々のゆはなみにこほりをくたく秋の夜の月
やはかゆく濱のまさをしきかへて玉になしつる秋の夜の月
玉をするうらむのかせに空はれてひかりをぬす秋の夜の月

同

おもひくまなくても年のへぬる哉ものゆひかはせ秋の夜の月

新四

大原らきの杜の木の間をよりゆゑて人たのめなる秋の夜の月

同

あやなくも曇らぬよひをゆとふかな志のふの里の秋の夜の月

同

ふけゆけは烟のあらし志ほかまのうらみなはてそ秋の夜の月

同

うき身にはなむむるかひもなむりけり心にくもる秋の夜の月

同

なかめつとおもふにぬると袂のなほく世のなみむ秋の夜の月

同

ふくるまてなむむれのおそ悲まけれ思ひもゆれし秋の夜の月

同七

たかさこの松もむかまになりぬらまなほゆく末は秋の夜の月

同十

みしひともとふの浦風おとせぬよつれなくそめる秋の夜の月

同十四

おもかけのむすれぬ人にとそへつと入をそまたふ秋の夜の月

同十六

みやまにもひとやまつらむ石山のみ糸にのこれる秋の夜の月

同

すつとならばうき世をゆとふ印あらん我身の曇れ秋の夜の月

同十九

やのらくるひありにあまる影なれや五十鈴川原の秋の夜の月

六帖

久方のあまつそらよりけ見れはよくととゆなき秋の夜の月

同一

音にのみちるとたぐへきもみち葉を色まらせつる秋の夜の月

續 同 代 同 同 同 同 同

水やそら空やみつとも見えむのそをひてすめる秋の夜の月
いれのく千種の花にみたれたるつゆもくもらぬ秋の夜の月
万代のかけをみまよとおほそらもてりまさるらむ秋の夜の月
見る人のまよゆや空になりぬらんくまなくてらそ秋の夜の月
ゆくすゑもおもへひささ少女子か袖ふるやまの秋の夜の月
うすくもはむらくゝあゆむ大空よさはれむたる秋の夜の月
いつくにか思ふまをもしのふへに隈なく見ゆる秋の夜の月

同 同 同 同 同 同 同

浮世をもなくさめなむらひかなれぬ物かなあはる秋の夜の月
なかむれぬいなや心のくるしむにむたくなすみそ秋の夜の月
つくは糸の山鳥のをのまさかみあけてむてたる秋の夜の月
旅ひとのむたる野原のつゆおきてやとりもあへぬ秋の夜の月
みやこにてゆかにかたらむむの國や吹あけの濱の秋の夜の月
まどろましこをひならてはいつあみむ黒戸の濱の秋の夜の月
人のみな春にあゆをよせつらむ吹あけのはまの秋の夜の月
なきこふる袖にひあゆ宿るへきくもりならぬ秋の夜の月

同

天の戸をあくるもあらず詠めつと見れどもあかぬ秋の夜の月

同

何くに思ふことをもあへきくまなく見ゆる秋の夜の月

同

雪うとておきて見つれば朝ほらけゆるときあた秋の夜の月

同

ゆつといるとあまつ空なる心地して物おもはする秋の夜の月

勅

あしひたの山のほらあよ雲きぬてひとりそらゆく秋の夜の月

同

袖の上に露おきそめしゆふへよりなれてゆく秋の夜の月

同

見けぬるく野原のつゆの袖の上にまつあるもの秋の夜の月

同

そみ見たるひかりも清し白たへのはまなのはあ秋の夜の月

同

おきつ風おけひのうらにまゐる浪のよるとも見ゆる秋の夜の月

○

後拾十一

夜をまめてあへる空こそなかりけれうらやましたる有明の月

後拾十五

たのめすのまたてぬる夜そ重綿ましたれもあかみる有明の月

千

ひとりねのなみたや空にかよふらむあくれにくもる有明の月

同

うき雲のかくるほとたにゆるものをかくれなはてそ有明の月

同

あへりつる名残のそらをなかむれなくさめかたき有明の月

同

同 見そるなよ世々のち紀りをすの原やふまみのさとの有明の月

同 まつほともゆとくころそなくさまぬをはすて山の有明の月

同 我ならほどなき夜はやしむらんなほやまのはに有明の月

同 新四 海まひきの山のはちうくそむとてもまたてやはみる有明の月

同 あきのよの長きひまそならりけれまつ夜ふけぬる有明の月

同 同六 おほそらのあきの絲さめの露けくはまたたかそてに有明の月

同 なかめつといくたひ袖よくもるらんしくれにふくる有明の月

同

まもまほる袖にもうけのこりけりつゆよりなれし有明の月

同

さえわひてさむるまくらにうけみれは霜ふかき夜の有明の月

同八

ふるさをわられま秋をかそふれのやとせになりぬ有明の月

同十

もろともになてし空こそわすられ絲みやこのやまの有明の月

同十二

つれなさのたくひまでやいつらからぬ月をもめてま有明の月

同十三

かへるさのものとや人のならむらんまつ夜なからの有明の月

同十四

わするなを今はのこるかはるともなれしそのとの有明の月

同

同十六 今まんとちきりしことゆめなからみし夜にとたる有明の月

同 思ひいつるひともあらずの山のはにひとりそいりし有明の月

同 やまのはにおもひもぬらま世の中のとてもかくても有明の月

同 うき身世にならへいなほおもひ出よたもとに契る有明の月

同 山のはをぬてともまつの木の間をりまゝ海つくしの有明の月

同 おもひやれ何をまのふとなけれともみやこおほゆる有明の月

同 夜もすからひとりみ山のまきのはにくもるもすめる有明の月

同 すみきけんむかまの人のおけたえてやともるもの有明の月

同二十

代 見かこゝゆ猶はれやらぬあはれにほのろに見ゆる有明の月

同 さひしさをなにとたとへて詠めままかきみてのこる有明の月

同 やまのせに時雨やとほくなりぬらむくもにたまらぬ有明の月

同 あきのせまにまの浦こくおなひとのゆるまほさむね有明の月

同 おもひしるひとに見せはや山さとのあきの夜ふかき有明の月

同 こゝろすむ限りなりけりぬまやまのふるねみやこの有明の月

同 ゆくへなれたひの空にもおくれぬのみやこに見ゆる有明の月

同 同 同 同 同 同 同
 小夜ふけて露やおくらんむらそと記志のにはのめく有明の月
 たくひなくおはゆるものそ秋の夜のうさくもかゝる有明の月
 うき雲のうくるほとたに可ひ志記よかくれなはてそ有明の月
 待出てもぬゝになかめん且するなとぬひしはかりの有明の月
 たかために契らぬ夜はをふしわひてなゝめはてつる有明の月
 さひしさを何にたどへてなかめま志かすみてのまる有明の月
 なかめてもうはの空なるゝたみかなわれしまとの有明の月

同 同 勅 同 同 月
 歸るさのおもふけをのみ身にそへてなみたにくもる有明の月
 ぬるまでもなゝめつるかな我世子のいつるにぬてし有明の月
 あま人をまつ夜ふけゆくやまのはにそらたのめせぬ有明の月
 むらくものまた志記はてぬとやまをり時雨にきはふ有明の月
 うぢはへてふゆはさはかり長き夜になほのこりけり有明の月
 くれてゆくあきのみ空をなかむれいなこりゝはなる有明の月
 ○

後拾四

さひしさに宿を立出てなゝむれはぬつくもかな志秋の夕くれ

同四

君なくてあれたるやとの淺茅生にうつらなくなり秋の夕くれ

同五

年つもる人こそゆとを去まるれけふはかりなる秋の夕くれ

同十

ゆゑはかり淋しゐるらむ木からしの吹去くやとの秋の夕くれ

同十七

思ひやるころさへこそむしけれおははら山の秋の夕くれ

同十九

花咲りはるのやまへのゆけはのにおもひむするな秋の夕くれ

續

ゆに去へをこふる涙もひまそなれたつゆおきそふる秋の夕くれ

同

おのつからおとなふ物の庭の面のあさちなみよる秋の夕くれ

同

千

見しひともゆれゆく宿のをみなへ去ひとり露けき秋の夕くれ

同十四

なにどなく物そゐな去たすゝ原やふしみのさとの秋の夕くれ

まつとてもゐはかり去そのゆらま去か思もゆけぬ秋の夕くれ

月

たひころもかたしく袖もつゆおきてやとる月さへ秋の夕くれ

同

ゆにしへをこふる涙もひまそなきつゆおたそふる秋の夕くれ

詞

ひとりゐてなゐむるやとの萩の葉よ風こそむたれ秋の夕くれ

勅

も去はやくけふりも空にうつもれぬすまの關屋の秋の夕くれ

新一

わするなよたのむの澤をたつ鴈もゆなはのかせの秋の夕くれ

同三

ひさきおふる片山影に去のひつとふたけるものを秋の夕くれ

同四

なかむれはまるもて涼し久らたのあまのかはらの秋の夕くれ

同

をくら山ふもとの野への花さくきはのかよ見ゆる秋の夕くれ

同

おしなへて思ひしことのかすくになほ色まさる秋の夕くれ

同

物おもはてあくる露やの袖におくなかめにけりな秋の夕くれ

同

さひしさはその色としもなかりけりまたたつ山の秋の夕くれ

同

心なき身にもあはれはまられけりまきたつさはの秋の夕くれ

同

見渡せのはなも紅葉もなかりけりうらのとまやの秋の夕くれ

同

たねてやの思ひありともいふとせんもくらの宿の秋の夕くれ

同五

我ならぬひとあはれやまさるらむあなく山の秋の夕くれ

同

むらさめの露もまたひぬまたのはに霧たちのほる秋の夕くれ

同九

別れちはいつもなけきのたねせぬにいと悲しき秋の夕くれ

同十四

詠めてもあはれとおもへおほかたの空たにかなし秋の夕くれ

同

まゝこひは庭のもくらのうらかれて人をも身をも秋の夕くれ

同

あれはてゝあきの庭こそ哀れなれまゝてきえなん秋の夕くれ

同十七

いとひても猶もとの志き世なりけりよ志のと奥の秋の夕くれ

同十八

嬉まさいとすれやはする志のふ草しのふるものを秋の夕くれ

代

なかめしとおもふ心もこりはてすあはてとしふる秋の夕くれ

同

萩の葉をなひかそよせの音記けいあはれ身に志む秋の夕くれ

同

ゆくかへりなれてもあなし萩原やす志こすよせの秋の夕くれ

同

ありてうたをきの葉風の音すれはまたれぬものを秋の夕くれ

同

つゆまけ花をはな葛花ふくかせよたまぬきちらす秋の夕くれ

同

なをさりの小野の淺茅におくつゆも草葉にほまる秋の夕くれ

同

なくむ志の聲の色にい見え糸ともうきは身にしむ秋の夕くれ

同

眞葛はふあたの大野になくむしのひとつうらみの秋の夕くれ

同

露霜になれてつれなきむしの糸もまよゆにあまる秋の夕くれ

同

せみの聲む志のうらみそきてゆなる松のうてなの秋の夕くれ

同

なかむれの悲し花ものと志りなら猶うとまれぬ秋の夕くれ

同

なにことこ心にもものいとか糸ともあはれとぞ思ふ秋の夕くれ

同

なにも志とおもひもまよぬ袂かなむなし花そらの秋の夕くれ

同 同 同 同 同 同 同 同

人のおやのおもふ心やゆゑならむこゝひのもりの秋の夕ぐれ
思ひゆつるやまにてもまたなく鹿のなほうき時ハ秋の夕ぐれ
おもふとちゆさみにゆるん宮城のと萩かはなちる秋の夕ぐれ
いつもたぐさひしきものか津の國のあしやの里の秋の夕ぐれ
ゆきかへりふる里人に身をなしてひとりなかむる秋の夕ぐれ
つ絲よりも物おもふとのまさる哉うへもいひけり秋の夕ぐれ
いつまでも思ふよ物のかなまきハあはれまつまの秋の夕ぐれ

同 同 同 同 同 同 同 同

今とてもおなしみやまのやとなれば人こそこの絲秋の夕ぐれ
今の身に何をうれしとなけれどもなみたそおつる秋の夕ぐれ
なむむれハそころにおつる涙のないかなるそらそ秋の夕ぐれ
なく泪つゆにそはれるまたくしのおの世なかし秋の夕ぐれ
木のもとに旅の日あそこのふるまゝに時雨かちなる秋の夕ぐれ
たのめおきまとの葉さへそ霜かれて我身むなした秋の夕ぐれ
吹おくるかせの音あそさひしけれ木の葉のさとの秋の夕ぐれ
なかむるにぬると袂をうらみても身のどかならぬ秋の夕ぐれ

新六

○

ふりそむる今朝たに人のまたれつるみやまの里の雪の夕くれ

同

駒とめて袖うちはらふけもなしさのこむたりの雪の夕くれ

○

新十六千一

あれむたる秋の庭こそほのれなれまきてきぬなん露の夕くれ

新四

秋のせのゆたりゆたらぬ里のほらしたと我からの露の夕くれ

○

同三

ほととぎすなほうとまれぬ心哉なうなくさとのをその夕くれ

同十二

年もへぬゆのるもきりの初瀬山をのへのか糸のをその夕くれ

○

同二

おもひたつ鳥のふるすをたのむらむなれぬる花の跡の夕くれ

○

同三

うちあめりあやめをかをるほととぎす鳴や五月の雨の夕くれ

○

同十

まくらとてはつれの草に契るらんゆくを限りの野への夕くれ

○

同十七

ふるはたのそはのたつ木にゐる鳩の夏とふ聲のすこた夕くれ

○

代

いたつらに花やふるらんたうやどのをのへの宮の春の夕くれ

同

ゆかにせんさならぬことも思ふ身にまゑて別れの春の夕ぐれ

○

新十一

思ひつとへにけるとまのあひそなき只あらしの夕ぐれの空

同四

身よとまるおもひを萩のうら葉にて此ころかなし夕ぐれの空

同

み山ちやいつより秋のゆるならむみさりまぐもの夕ぐれの空

同八

君ゆな月まつとてもなめやらんあつまの方の夕ぐれの空

同十二

なめむひそれとなしに物思ふくものはたての夕ぐれの空

同十四

うらみわひまたま今の身なれとも思ひなれにし夕ぐれの空

同

こころまそゆくへもしらぬみまの山杉のこすゑの夕ぐれの空

同十五

今さらに住うしとてもゆかきせんあなたのまほやの夕ぐれの空

同十七

たのすみてあはれしるらむやま里の雨ふりすさむ夕ぐれの空

同十八

いたつらに過にしとやなけかれんうけかたた身の夕ぐれの空

同二十

今そこれ入日を見てもおもひこしみたのみくにの夕ぐれの空

千

たなはたの心のうちやいかならむまもこしけふの夕ぐれの空

同

月まつとひとにはいひて詠むれはなくさめあたき夕ぐれの空

同

同六 ならむれはおもひやるへき方そな杞春のさきりの夕くれの空

同七 以てぬより月見よとこそさえにけれをはすて山の夕くれの空

勅 岩糸ふみみねの志ひ柴をりしきてくもにやとかる夕くれの空

代 秋とゆへに物をそおもふ山のはにゆさよふくもの夕くれの空

同 ほととぎすこころしてなけたちはなの花ちる里の夕くれの空

同 いつあたへ行とのしらんほととぎすたこひと露の夕くれの空

同 今のはや人のとふまでなりにけりおもふあまりの夕くれの空

同 色かゝるを野のくさ葉よかくつゆのほまり戀まに夕くれの空

同

秋たちてことそともなくかな志きの萩の葉そよく夕くれの空

新十八

同 君の代にあへるはかりの道はあれと身をは頼ます行末のそら

同十九 おほそらに契るおもひのとしもへぬ月日もうけよ行末のそら

契りゆれに嬉しきうくるをりにあひぬ忘るな神も行末のそら

新十三

同 又もてん秋をたのむの鴈たにもなきてあそへる春のあけほの

同二 花そみるみちの志は草ふみまけてま志のと宮の春のあけほの

同八 みましのと高根のさくらちりにけり嵐も志跡記春のあけほの
 立のほるけふりをたにも見るへきに霞にまらふ春のあけほの
 同二 またやみんうたのこみのと櫻うり花のゆきちる春のあけほの
 勅 山のはも空もひとつに見ゆる哉これやうそめる春のあけほの
 同 月ならてなかむるもの山のはよよま雲とたる春のあけほの
 同 月かけの梢にのこるやまのはにはなもかすめる春のあけほの
 同 若らくもの八重山櫻さきにけりとまるもさらぬ春のあけほの
 同 すみと若のまつの嵐もうそむなりとは里を野の春のあけほの

代 同 同 同 同 同 千

梅のえの花に木つたふうくひすの聲さへにはふ春のあけほの
 何しかもとそれぬる哉なつかしや梅さくやどの春のあけほの
 心あらあくかれそめし花の香になほものおもふ春のあけほの
 花の色をそれるとそおもふ少女子か袖ふる山の春のあけほの
 若つかなる花の林のあたりにいかせもふかそや春のあけほの
 江たかはす梅のはつはなさきにけり松風にほふ春のあけほの
 風とたるのきはの梅にうくひすの鳴て木つたふ春のあけほの

勅

淋まさのぬつも詠めのものなれやくもまの峰の雪のあけほの

○

新三

忘れめやゆふひを草に引ひすひかりねの野邊の露のあけほの

○

同八

蓬生よはつうおくへき露の身の今朝の夕くれ明日のあけほの

○

同十六

いく千代も變らぬ君か御代なれと猶惜まると今朝のあけほの

○

同六

橋姫のあたしく衣さむるにまつ夜むなまきうちのあけほの

○

同

たぐひとそ涙のおつるかへる鴈なきてゆくなりあけほのと空

同

天の原ふまのけふりの春の色のうそみになひくあけほのと空

同

今のとてたのむの鴈もうちにはひぬおほ汐月夜のあけほのと空

同二十

これやこのうた世の外の春ならむ花の戸はそのあけほのと空

千

春のなは花の匂ひもさもあらぬたれた身にしむの曙のそら

同

くれぬともちきりてたれかちきるらん思ひたえせぬ曙のそら

金

はとときすほのめく聲をいつうたときとまとはまつ曙のそら

勅

同

ほととぎす雲の上より語らひてとはぬになのるあけほのと空

代

名もしる志峰のあらしも雪とふる山さくら戸のあけほのと空

同

花をしむまゝと海のはての山里にはるくれうとるあけほのと空

同

哀れにもはのうにたくとくひな哉老の糸さめのあけほのと空

忘れをな猶さりとにたのめおきて空をしみせしあけほのと空

新六帖一

新二

思ひやるころはありはさはらしを何へたつらむみねの白雲

同

吉野山はなやさありよなりぬらむふるさとさらぬみねの白雲

同七

ちりまかふ花のとそめのよ志の山あらしにさむくみねの白雲

同八

神無月もみちも志らぬとたの木のころつよかくれみねの白雲

同十一

尋糸きてゆかにあはれとならむらん志となた山のみねの白雲

千

とそにのみ見てやとみなむかつらきや高間の山のみねの白雲

同

よしの山はなひなかはに成にけりたぬくのこるみねの白雲

同

をはつせの花のさかりに見渡せのかすみにまかふみねの白雲

金

みと志のと花のさかりになりぬれはたとぬ時なたみねの白雲

さくら花さきぬるとたの志の山たちものほらぬみねの白雲

月 同 同 同 同 同 同 同

あつらたや高間のさくらさきにけり春のたえせぬみねの白雲
さくら花ちりなん後のすかたをいかはりて見せよみねの白雲
よしの山まそゑに花のちるまゝにたぬくになるみねの白雲
咲そめる花のを見ればさもほらぬ幾度きぬぬみねの白雲
けふもまた花まつほとなくさめよ詠めくらしつみねの白雲
やまさくら咲をりそらにあくある人のもとゆやみねの白雲
花見にとほそく山ちにいとまよくころさむかすみねの白雲

代 同 勅 同 同 同 同

とまのうちに春たつことやまゑのやま霞のくれるみねの白雲
花と見て山ちのすゑになりぬれとまたぬつりのみねの白雲
よそにてい花とも見ぬしたつねたて若葉そむかんみねの白雲
またちらぬさくらなりけりふる里のましの山のみねの白雲
花なれやとやまの春のあさはらけあらまにをるみねの白雲
ぬのはかり花さきぬらむましの山かすみにあまるみねの白雲
うつろへい人のことゆそあともなき花のかたみみねの白雲
おもかけに花のすゑたを先たてとぬく重てぬきぬみねの白雲

後十四

○ 以つとなくまゝ空なるをうこひやふしの高縁にうくる白雲

新一

かつら紀や高間のさくらさきにけり立田のおくにうくる白雲

千

おまなへて花のさうりとなりけり山のはことにうくる白雲

勅

たちのあすこそあも見ぬを山さくら花のあたりにうくる白雲

同

咲ぬまではなとも見えあやまさくらおなし高根にうくる白雲

代

またれつる花なりけりなやまさくらかそみの上にもうくる白雲

同

をとめ子あかささのさくら咲よけり袖ふるやまにうくる白雲

同

春のそみとけそか縁つる朝なくはなさくみ縁にうくる白雲

月

と志の山をのへのはなやさきぬらむ松をいおたてうくる白雲

同

さきそむる花のそみゆるあつさゆみはるの山へにうくる白雲

同

さくら花さ紀にけらあしひきの山のうみより見ゆる白雲

古六帖六

新

岩ねふみかさなるやまをわけすてと花もゆくへのあとの白雲

同

見すられぬ人のためとや残りけむあすよりさきのはなの白雲

同二

月

ゆふ霞みくまりやまにふかけれたつとも見ぬはなの白雲

續

○ 春のせやなと吹なへにたかさをのへよたゆるはなの白雲

新十八

としのかのぬいせのなみにをるはなや青糸の峰にきゆる白雲

世の中をおもひつら糸てなかむれぬなまき空にきゆる白雲

同十

○ あけのまたこゆへき山のみねなれやそらゆく月のすゑの白雲

代

風むすふひはらの時雨かきくらしあなしのたけにのこる村雲

同

かたしきのころもてさむし時雨つとありあけ山にのこる村雲

同

さきそむる花かとそ見るあつさゆみ春のやまへにのこる村雲

勅

そてぬらすまくれなりけり神無月ゆこまのやまにのこる村雲

同

○ 我戀はあふをかたりのたのみたにゆくへもあらぬ空のうた雲

同

巡りあへん限りいつもしら糸とも月な隔てそをそのうた雲

同

○ ゆくめぐり空ゆく月もへたてきぬ契りしなかくそのうた雲

古二

花のちるまどやまひまを記春かすみたつたの山のうくひすの聲

後一六帖六

梅のはなちるてふなへに春雨のふりてつとなくうくひすの聲

拾一六帖

あら玉の年たちつるあしたよりまたるゝ物のうくひすの聲

同一

こほりたまとまらぬ春の谷風にまたうちとけぬうくひすの聲

同

青柳のはなたの糸をよりほりせてたえまも鳴らうくひすの聲

同十六

ゆたゝへる春をもあらし花さかぬみ山おくれのうくひすの聲

後一六帖

いもかひへのはひりにたてる青柳に今や鳴らんうくひすの聲

後拾一

ふりつもる雪きぬたき山里にはるをしらするうくひすの聲

新一

あつさゆみ春山ちのく家おきてたぬすたくらむうくひすの聲

同十六

谷寒みはるのひありのおそければ雪につとめるうくひすの聲

代

はる霞たなひく空をなかめつとまつそくるしきうくひすの聲

同

春ことに鳴をあはれときとそめて身にしむ物はうくひすの聲

同

年をへてたけともあらし我宿のはなに木つたふうくひすの聲

同

雪のうちに春は有ともつけなくにまつる物はうくひすの聲

同

山里の春のかすみにとちられてすみかまとへるうくひすの聲

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

おほつかなゆつくなるらん花さかぬ霞のうちのうくひすの聲

卯の花のさけるかきねよ時ならて我ことそなくうくひすの聲

色ならて身にしむ物の春の日にをちのへりなくうくひすの聲

あわれにもきてゆなるるな我宿の梅ちりかくるうくひすの聲

梅の花匂はぬほとそまたれける香をとめてくるうくひすの聲

青柳のうつらにすへく成までにまでともなぬうくひすの聲

六帖二

あつさもみ春のやまへに家ゐゑて我まつきかんうくひすの聲

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

同五

春來ぬと今のゆふきの山へにもまたしかりけるうくひすの聲

あまひきのやまたにこえて野司に今のなくらんうくひすの聲

梅の花さけるをうへに我をれいともしくも有るうくひすの聲

かせ山の木立をまはみ朝さらすきなきともすうくひすの聲

けふそきくみ山かくれのおるすをり梢にうつるうくひすの聲

はるなから年はくれなん藤の花をしとなくなるうくひすの聲

○

六帖

うちなひき春さりくれのあをやきのねたくひもちて鶯のなく

同六 　　むらさきの糸はふよて野の春野にひきみをこひつゝ鶯のなく

同 　　たのまれぬ花のまゝろとおもへぬやあらぬさ花をり鶯のなく

同 　　うちなひき春さりくれのさゝの葉は尾羽うちふりて鶯のなく

古一六帖六 　　ふゆくれて春さりくれのさゝの葉は尾羽うちふりて鶯のなく

同六帖二 　　はるたての花とや見らん若らゆたのまゝれるえたに鶯のなく

同 　　はるたてと花もにははぬやまさとものうかるねに鶯のなく

同十 　　をりつればそてまそにははへうめの花ありとやこゝに鶯のなく

世にふれのことの葉をけきくれ竹のうきふまことに鶯のなく

後一

拾二 　　かきくらし雪は降りつゝしかすかに見かきくそのに鶯のなく

新二 　　卵のはなを散りに若らうめにまかへてや夏のかきねに鶯のなく

同 　　あたらしくあくる今宵をもとせのはるのはしめと鶯のなく

代 　　かすみたつはるのやまへのさくら花あかすちるとや鶯のなく

同 　　うめの花ちりぬるまてに見ぬさりしひとく今朝の鶯のなく

同 　　うちなひきはるさりくれはひさきおふる片山かけに鶯のなく

同 　　ふはのせきあさこえ行けはかすみたつ野上のかたに鶯のなく

同

けさ見れハ春きにけらし且かやどのかきねのうめに鶯のなく

勅

卯のはなのいろこそ梅にまかふとも香をわすれてや鶯のなく

千

やまかせに香をたつねてや梅のはなにほへるさとに鶯のなく

やまさどのかきねや春をあらるらんうきまぬさとに鶯のなく

六帖一

はるの日にかすみたな引うらかなしこのゆふかけて鶯もなく

同六

むらくに木つたふ春に也にけり山のまにくうくひすなくも

同

うちなひき春さりくれは青柳の枝くひもちてうくひすなくも

同万

梅の花ちらまくをしも我そのと竹のはやしにうくひすなくも

新五

たくへくる松の嵐やたゆむらんをのへにかへるさをしかの聲

同

野をけせしを野の草ふし荒はてとみ山にふかきさをしかの聲

同

み山への松のこそを渡るなりあらしにやとすさをしかの聲

同

萩の葉にふけハ嵐のあきなるをまちける夜はのさをしかの聲

千

みなと川うきねの床にきてゆなり生田のおくのさをしかの聲

同

夜をこめて明石のせとをこた出れは遙におくるさをしかの聲

同

をのへより門田にかよふ秋風にいなはをわたるさをしかの聲

勅

うへしこそ此頃ものあはれなれ秋はかりきくさをしかの聲

同

をくら山ふもとをこむる夕霧にたちもらさるゝさをしかの聲

同

春日山もりの下みちふみわけていくたひなれぬさをしかの聲

金

思ふことあすあけかたの月影にあはれをそふるさをしかの聲

代

いはりさす葉山かはらのかりねに枕になるゝさをしかの聲

同

あたらせに妻戀すらしあしひきの山のをのへのさをしかの聲

万八

同

此ころの朝けにきけのあしひきの山をとよしみさを鹿なくも

同

君にこひうらひれをれのしきの野の秋萩しのきさを鹿なくも

同

山のへにいゆくさつをの多けれと山にも野にもさを鹿なくも

同

秋はきのちりゆくをみていふかしみ妻戀すらしさを鹿なくも

六帖二

妹に我うら戀をれのあしひきのやましたとよみ鹿そなくなる

後拾四

まかきなる萩の下葉の色をみておもひやりつゝ鹿そなくなる

同

かくら山たちとも見えぬ夕きりに妻まとはせる鹿そなくなる

千

夕されのをのゝ萩原ふく風にさひしくもあるか鹿そなくなる

同

世の中よ道こそなけれおもひいる山のおくにも鹿そなくなる

新五

ねさめして久しく成ぬ秋の夜の明けやあぬらん鹿そなくなる

同廿

草ふかきかり場のを野をたち出て友まとはせる鹿そなくなる

勅

雲のゐることすゑはるかよ霧こめてたかしの山に鹿そなくなる

代

日影さすをかへの松のあき風にゆふくれかけて鹿そなくなる

同

山ふかき秋の夕へをきて見れ木の葉しくれて鹿そなくなる

同

秋風のふくゆふくれの船木山こゑをほにあけて鹿そなくなる

同

さきあまるを萩の原のうつろへの野風をさひみ鹿そなくなる

同

くれてゆく秋やかなしきあらあふく小松か峯に鹿のなくなる

同

高島やまつのこすゑにふく風の身にまひときを鹿もなくなる

同

神無月しくれあぬらし葛の葉のうらこかるねに鹿もなくなる

代

つれもなき妻をやたのむ秋風の身にさひき夜の鹿もなくな

同

つれもなき妻をやたのむ秋風の身にさひき夜の鹿もなくな

同

つれもなき妻をやたのむ秋風の身にさひき夜の鹿もなくな

夕月夜あかつきやみのむら雲になみたしくれて鹿もなくなり

同

風ませに村雨ふりて片をかのならの葉かくれにを鹿なくなり

續

露むすふを萩の下葉みたるらんあきの野はらにを鹿なくなり

代

契りおくみ山のおくのあかつきに猶うきものと鹿なくなり

古四

秋萩にうらひれをれいほしひきの山したとよみ鹿のなくらむ

新五

下紅葉かつちる山のゆふしくれぬれてやひとり鹿のなくらん

代

ひとり糸の長紀ならひの秋の夜を明しかねてや鹿のなくらん

同

ひまのまたおのう時とやたかまどの秋萩のき鹿のなくらん

同

立田山ゆかつきささむ紀あきうせに紅葉ふみりけ鹿のなくらん

同

秋といへいさらて明すも長き夜をい糸すきけとや鹿のなくらん

同

わか門の板をかくる小山田よさとくほじとや鹿のなくらん

勅

ゆく人をとこめか糸てやうりふ山みね立ならし鹿もなくらん

金

夏ころもすそ野の草をふく風におもひもあへす鹿やなくらん

同

狩にくる人もきよとやふちはかま秋の野ことに鹿のたつらん

同

澤水にほくしの影のうつれるをふたともしとや鹿の見るらん

六帖三

ゆき萩の花のなかるく川瀬よのまゝらみかくる鹿のねもせそ

後五

聲たてゝ鳴をしぬへき秋たりに友まとはせる鹿にのあら孫と

六帖一

人忘れすねをやなくらむ秋霧のいろつくまで鹿のこゑせぬ

勅

秋ふらぎ紅葉のゆるのくれなゐにふり出てなく鹿のこゑかな

古四

我せ子かころものすそを吹ひへしうらめつらしたあきの初風

拾三

なつころもまたひとへなるうたゝねに心まてふけあきの初風

詞

君すゝめとはましものを津の國のゆくたのもりのあきの初風

新四

あけぬるか衣手さむしきうはらやふあみのさとのあきの初風

同

しきたへの枕のうへにすきぬなりつゆをたつぬるあきの初風

同

水くきのをのくす葉も色つきてけさうらかなしあきの初風
 おしなへて物をおもはぬ人にさへこゝろをつくるあきの初風
 うたゝ糸の朝けの袖にかはるなりならずあふきのあきの初風
 あさはらけ萩の上葉のつゆ見れいやはたさむしあきの初風
 ひさきおふる片山かけにしひつごふきける物をあきの初風
 たなはたの衣のつまひあくらしてふきなかへしそあきの初風
 うちよする波の聲にてしるきかなふきあけの濱のあきの初風
 乙たの原朝みつゑほのいやましにきくしくなりぬあきの初風

同 同 同 同 同 同 代

ならひないそれもさこそと思へとも猶ほはれなるあきの初風
 ゑかよして身にまむ色をそめつらん音あそあらめあきの初風
 淋まのあはれをしらぬ宿もあらしよもの草木のあきの初風
 今さらにきけはなほこそかなしけれか糸て思ひしあきの初風
 ゑつしかと萩の上葉のおとつれてそてにしらるゝあきの初風
 身にしめとふきにけらまな玉もかるあさりの浦のあきの初風
 きのおこそ夏にくれしか朝戸出のこたもてさむしあきの初風

同 同 同 同 同 同 勅

暮ゆゑの空のけしきもいかならん今朝たにかなしあきの初風
 同 ときとむるおとたよかれ山城のときはのもりのあきの初風
 同 よる波のそとしくあるかしたたへの袖まのうらのあきの初風
 同 おとたてくいまはたふきぬ我やどのをきの上葉のあきの初風
 同 ひさかたの岩戸の關もゆけなくに夜はにふきまゝくあきの初風
 同 たまにぬく露のほれてむさしのと草葉にむすふあきの初風
 同 夕されのあろもてまゝし高まとのをへのみやのあきの初風
 同 なつすきてけふやいくかになりぬらん衣手すくしあきの初風

月

月 ゆあまくれ宿の門田におとすなりこれや身にしむあきの初風

丙八

きみまつと我戀をれりまか宿のすたれうまかじあきの風ふく

古四六帖

古四六帖 きのおこそ早苗とりまかいつのまに稻葉そよきて秋風のおく

万八

万八 萩の花さきたる野へのひくらまのなくなるなへに秋風のおく

六帖

六帖 我せ子をいつそ今かどまつなへにおもやの見せん秋風のおく

あるき歌の秋風のおくとゆり金葉集をりてなたの秋風そ
 おくとあり

新四

ふしみ山松のかけをりみわたせのあくる田おもに秋風そふく

きのおまでよそにまのひし下萩のすゑ葉のつゆに秋風そふく

手もたゆくならず扇のおきとこ汐わするはうりに秋風そふく

たなはたのひまの羽衣うちかさ糸ぬる夜すゑまき秋風そふく

時しもあれふるさと人はおともせてみやまの月に秋風そふく

夕されの玉ちる野へのをみなへしまくらさためぬ秋風そふく

月いなほもちぬ木の間もすみよしの松をつくして秋風そふく

同 同 同 同 同

同

つまこふる鹿の立とをたつぬれのさやまのすそに秋風そふく

同五六帖一

むか宿のをはなかすゑのまら露のおきにし日をり秋風そふく

同五

鶉なくかた野にたてるはしもみちよりぬはかりに秋風そふく

同

ふるさとにちるも紅葉にうつもれて軒のまのふに秋風そふく

同

野原よりつゆのゆかりをたつね来て我ころもてに秋風そふく

同十

初瀬山ゆふこはくれてやとこへはみわのひはらに秋風そふく

同

旅糸きてあかつきうたの鹿のねにいな葉おしなみ秋風そふく

同十四

同

忘れしの言の葉いふになりけむたのめしくれハ秋風そふく

同

さらてたにうらみと思ふ我妹子のころものすそに秋風そふく

同十五

里ハ荒ぬむなしき床のあたりまで身のならばしの秋風そふく

同十七

老ろたへの袖のわかれに露おちて身にしむいろの秋風そふく

金

くちにけんなからの橋をきてみればあまの枯葉に秋風そふく

同

たまほこの道のしは草うちなひきふるきみやこに秋風そふく

千三

夕されは門田のいな葉おとつれてあしのまろやに秋風そふく

みそきする川瀬にさよやふけぬらん歸るたもとに秋風そふく

代

夏あろもまたかへなくに萩の葉のすへうちなひく秋風そふく

朝戸出のころもてさむし鴈の糸のきこゆるそらに秋風そふく

おとつると野への草木ハかはれともひとつ哀れに秋風そふく

あさちあのを野のしの原うちなひきをちかた人に秋風そふく

おほかたのうき身に時のむかねとも夕くれつらき秋風そふく

とまをへてあれのみまさる故郷のをきの葉さやき秋風そふく

月かけハこほりと見えてよしの川いはこすなみに秋風そふく

同

同

同

同

同

同

同

同 あさはらけなくねさむけき鴈の糸の葉月のそらに秋風そふく

同 つゆまけきよもきかねやのひま見えてふるき枕に秋風そふく

同 いせしまや若のまつ原見えたせのゆふまほりけて秋風そふく

同 たかさこの松たにつらきゆふくれに鹿のねかけて秋風そふく

同 立田やまあさきりかくれなく鹿のまゑのゆるなる秋風そふく

同 山城の鳥羽田のおもを見えたせのほのかよ今朝そ秋風そふく

同 さらてふす糸やの板戸も今宵こそひきたてつへき秋風そふく

同

おほかたのなひく草葉のどかねともをきの上葉そ秋風そふく

勅

我宿のきくのちさつゆ色もをしてはれてにはへ庭のあきかせ

千四

さまざまの花をの宿に移ち植て鹿のねさそへ野へのあきかせ

代

色かはる葉山のみ糸に鹿なきてを花おきてす野へのあきかせ

新四

ふらぐさの里の月影淋まもすみとしまとの野へのあきかせ

同

おちはかまぬしの誰とも白露のてはれて匂へ野へのあきかせ

同十六

葛の葉のうらみに歸る夢の世を忘れられたみの野へのあきかせ

同

はしあひのゆふへ涼したあまの川もみちのはむをむたる秋風

同

ひをへつと音こそまされいつみなるまのたの杜の千枝の秋風

同八

玉ゆらのつゆもなみたぎとまらてなき人こそるやとの秋風

同十七

人まぬふはのせきやの板ひさしあれにしものちりたて秋の風

同十

忘れなんまつとなひけそなか／＼にいなはの山のみねの秋風

同三

ほたるとお野澤にまける芦のねのよなく／＼したにむを秋風

代

夏こるもかとりぬの浦のうたゑ絲になみのよる／＼るを秋風

同

いかにせんつらさをそへて吹ぬなり君のきまさぬ夜はの秋風

勅

なつさきてけふやいくかになりぬらん衣手をくま夜はの秋風

新

あきまよふ雲井をむたる鴈の絲のつはさよならずよの秋風

代

思ふにもすきてほはれのきてゆるハ萩の葉みたるあきの夕風
六帖一万

戀つゝそ稻葉かきわけ家おせハともしくもあるかあきの夕風

金 まくすはらあたの大野のしら露をふきなはらひそあきの夕風

千 世とともにつれなきひとを戀草のつゆてほれますあきの夕風

勅 あそか河うは瀬の霧もはれやらていたつらにふくあきの夕風

後拾 おきあかし見つゝなかむる萩の上の露ふきみたるあきの夕風

新五 きてなといほもる袖やしをらん稻葉にかきる秋の風かハ

同四

花そときほに出ることもなき物をまたきふきぬる秋のかせ哉

代 白たへのまくらのちりハはらへともてぬ人つらき秋のかせ哉

後拾五 山里の賤う松かきひまをあらみいたくなふきそ木からしの風

新五 あすか河瀬々よ浪よるくれなるやかつらき山の木からしの風

同 あたの色をはらひはてとや久方の月のかつらの木からしの風

同 いつの間に空のけまたの變るらんはけしき今朝の木からしの風

同 時去もあれ冬の葉もりの神無月まはらになりぬ木からしの風

同十五

思ひ出る身のふりくさの秋の露たのめますゑや木からしの風

勅

吹からに身にそしみける君のけさむれをや秋の木からしの風

月

ふきくなり枯たる菊のあたりより聞なつゝしき木からしの風

勅

山里のあきのすゑにそ思ひまゐるかなしかりけり木からしの風

同

のこしかく秋のかたみのから錦たちはてつるゝ木からしの風

代

きゆるたに惜けよ見ゆるあき萩の露ふきおとさ木からしの風

同

みな人のあゝそのみ見る紅葉をさそひにさそふ木からしの風

勅

ふるさとのみかき原のはし紅葉こゝろとちらせゆきの木枯

千

もみち葉を關もる神にたむけおきてあふさか山をこゆる木枯

古三又六帖六

くるゝかと見れぬあけぬる夏の夜をあゝそとやなくやま郭公

新三又千一

むかし思ふ草のいほりのよるの雨になみたなそへそやま郭公

同

おのかつまこひつゝなくや五月やみかみなひやまのやま郭公

代

我きとてひとにもつけんまのさどにまつなきそめよやま郭公

後拾三

同十七

新三

同

同

同

同

代

きのおまで惜みし花の忘られてけふのまたるゝほととぎす哉

すへらきもあら人かみもなこむ迄なきける森のほととぎす哉

有明の月のまたぬにいてぬれどなほやまふかきほととぎす哉

小笹ふき賤のまるやのかりの戸をあけかたに鳴ほととぎす哉

五月雨の月につれなきみやまよりひとりも出るほととぎす哉

五月雨の雲間の月のはれゆくをしはあまちけるほととぎす哉

立出るなこりありあけの月影にいととかたらふほととぎす哉

同

同

同

同

同

同

同

おはらくの今年をきはとまつものをあわれもあらぬ時鳥のな

老ぬれなまつへきこともまたれぬにあくるにかくる時鳥のな

もろかつら草のゆかりにあらねともかけてまたると時鳥のな

さむしろにあやめのまくらそはたてときくも涼した時鳥のな

田草ひくをかのうのはなちるまてになほとあまのふ時鳥のな

きくひとのぼたに思ひぬはつあゑをなきすてとゆく時鳥のな

おきぬつとまつかひありて宿ことにかたらひ見たる時鳥のな

ゆふつく日いれのをくらの山のはにをちかへりなく時鳥のな

同

あまのかるいらこの崎のなのりそのなのりもはてぬ時鳥のな

代

まぢか縁てまとろめはまた來鳴なりひとくるまめの時鳥のな

千三

いにしへをこひつゝひとり越えくれのなきあふ山の時鳥のな

同

ゆふつき夜いるさの山の木かくれにほのかになのる時鳥のな

月

まつはとはちよにこころをつくさせてひと聲なる時鳥のな

同

ゆきちかふたそかれときの雲ちにてかたみになのる時鳥のな

同

さらぬたにみやこ戀したまのふゆなみたまよふそ時鳥のな

勅

さらてたにふそほともなき夏の夜をまたれてもなく時鳥のな

同

なかきよの森のしめなはくりかへしあかすかたらふ時鳥のな

六帖

ちはやふるたゝそのかみのまへにして空なきしつる時鳥のな

古三

夏山にこひした人やいりにけん聲ふりたてなくほととぎす

後三

うの花のさける垣ねの月清みいねすきけとやなくほととぎす

古三六帖六

むかやとの池の藤波さきにけり山ほととぎすいつか來なかん

同

いつのまに五月きぬらんあま引の山ほととぎす今そなくなる

拾二

春かけてきかんどもこそおもひしかやま郭公おそくなくらん
同六帖六

家に来てなにをかたらんあしひきの山ほととぎす一聲もかな
同

この里にいかなる人かいへゐして山ほととぎす絶えきくらん
後拾三

さくら色にそめしころもをぬきかへて山郭公けふよりそまつ
同

こゝよ我きかまほしねをあまひきのやま郭公いかになくらん
新三

あがあけのつれなく見ゆし月ひいてぬ山郭公まつよなゐらに
同

雨そとく花たちはなにかせすきて山ほととぎす雲になくなり
代

同

同

千

代

万

古三六帖

万十

またねども物おもふ人のかのつからやま時鳥まつそきてゆる

神まつるうつきの花もさきにけり山ほととぎす夕かけてなく

たちはなの花のさかりとなりけりやま郭公きなけまけ

五月雨の雲のたぬまに月さしてやまほととぎす空になくなり

春をいまいたくも戀しあし引の山ほととぎすうらみもそさる

玉にぬくあやめをいへにうゑたてゝやま時鳥かれすこんかも

やどりせま花たちはなもかれなくになど郭公こゑたぬぬらん

みなひとのまちし卯の花ちりぬともなと郭公見れわすれめや

六帖六

万

あま引の山のとそあし高けれなくほととぎす聲はるかなり

同

我妹子にやとのたちはな花をよみ鳴ほととぎす我を見にこし

小夜ふけてあかつき月のうけ見れなく郭公きけいなつかし

六帖六

同四

月をたにあかすとおもひてねぬものを郭公さへなき渡るかな

とほくゆく人をとしむとひともしみな郭公さへなきぬへらなり

後三

五月雨も春のみや人くる時のはととぎすをやうくひすにせん

下の句に時鳥をよみ入たるハ八代集中にハ大方これら也

古五六帖

秋風のおきにま日とりおとは山み糸のまそあも色つきにけり

古五

まらつゆも時雨もいたくもる山ハ下葉のこらす色つきにけり

同

みやまへに霞ふるらしと山なるまさきのかつら色つきにけり

後六帖

ゆまの川鴈そととたるさは山のとそあはうへも色つきにけり

拾六帖一

このあろのあかつき露にまか宿のはきの下葉ハ色つきにけり

拾三

同 風さひみじかりころもうつ時はきの下葉も色つきにけり

同十七 神なひのみひろのやまをけふみれの下草かけて色つきにけり

同六帖二万十 夜をさひみ衣かりか糸なくなへにはきの下葉の色つきにけり

千 秋風の日ことにおけりか宿のをかの木の葉の色つきにけり

同五 君こふるなみた時雨とふりぬれぬのふの山も色つきにけり

新五万十 初時雨ふるほともなくしもといふかつらた山の色つきにけり

同六万十 秋されぬおくら露もわか宿のあさちかうは葉色つきにけり

時雨のあめまなくし降はまきのはも争ひかねて色つきにけり

六帖一

同二 長月のまくれのあめにぬれとほりかすかの山は色つきにけり

同二 秋のせの日にけにおけり露をおもみ萩の下葉の色つきにけり

同 一 まくれの雨まなくし降の神なひの森の木の葉の色つきにけり

同 初まくれふるほともなくさほ山の紅葉あまねく色つきにけり

同二 秋霧のたつをけふりと見しほとに山の木の葉も色つきにけり

同六 山まなの岩田のもりのはとそ原いは糸とあきの色つきにけり

同 今朝のあさけ秋風寒くふくなへに野への浅茅は色つきにけり

ちはやふる神のいかきにはふ葛の秋にはあへそ色つきにけり

同 千鳥なくさはの川霧たちぬらしまきのますゑも色つきにけり

六帖一 ちぐれふる神無月こそちのくらし山のおしなへ色つきにけり

詞三 初霜もおきにけらしなけさ見れり野への淺茅の色つきにけり

六帖六万八 今朝なきてゆきし馬金さむみかもこの野の淺ち色つきにけり

万八 時雨のあめまなくしふれり三笠山こぬれあまねく色つきにけり

同 雨こもり心いふせみいて見れりかきらのやまの色つきにけり

同 馬の絲の寒くなきまも水くきのをかのくも葉の色つきにけり

同 馬の絲のな死にし日とり春日なるみかさの山の色つきにけり

同 夕されり馬のこえゆくたつた山しくれよきほひ色つきにけり

同 物思ふとかくろひをりてけふ見れり春日の山の色つきにけり

同 いちちろくちぐれのおめりふらなくに大城山は色つきにけり

同 つくま野におふる紫衣にすりいまたきそちで色つきにけり

六帖二

馬金をきこつるなへにたかまとの野への草木そ色つきにける

ちらねともか糸てそ惜きもみち葉の今を限りの色と見つれ

六帖六

あははきの咲ぬへかりし我やとの淺茅のはなの色つく見れ

万十

さともけよ霜はおくらししたかまどのやまの司の色つく見れ

同

紅葉する時になるらしひく人のかつらのえたの色つく見れ

六帖

くれなゐの夕への雨のふりくらししたつたの山の色つく見れ

勅

鴈なきてさむきあさけのつゆ霜にや野の神やま色つく見れ

拾三又十七

名をきけの昔しなからの山なれとしくる秋の色まさりけり

代

神無月しくるこまゝにうたをかのはこそその紅葉色まさりけり

六帖

神無月まくれふるらしさは山のまさきのかつら色まさりけり

同二

春ふかく成ぬるとき野へ見れ草のみどりも色まさりけり

古六帖一

我妹子かころも春雨ふることよ野へのみとりそ色まさりける

拾三

風さむみ我かりころもうつときそはきの下葉も色まさりける

六帖

神無月ふたつあるとしの時雨にのりもときくそ色まさりける

新一

はるさめのふりそめしより青柳の糸のみとりそ色まさりける

勅

みなそこにかけをうつせる菊の花浪のをるにそ色まさりける

○

古十二

くれなゐのふりてつくなく涙にいたもとのみ社色まさりけれ

後二

昨日みし花の香をとて今朝みれいねて社さらに色まさりけれ

新六

きくの花たをりてい見し初霜のおきなからこそ色まさりけれ

○

古

千鳥なくさほの川きりたちぬらし山の木の葉の色まさりゆく

代

秋あらく成にけらまなかたをかの森のこそ色の色まさりゆく

同

神無月まくれふるらしさは山のまさきのかつら色まさりゆく

同

春雨のふりそめしよりあをやきの糸のはなたそ色まさりゆく

○

古五

秋をおきて時こそ有けれ菊の花うつろふからに色のまされい

拾十七六帖六

もみちはやたもとなるらん神無月まくることに色のまされい

○

後六

あつさゆみいるさの山の秋霧のあたることよや色まさるらん

六帖六

くれなゐの袖そむ秋のすきにまを春さへなにく色まさるらん

千一

みなひとの心にまむるさくら花いくしほとまに色まさるらん

六帖六

いにしへをこふる涙にそひれとや紅葉もふかき色まさるらん

同二

草も木もみとりにみゆる春の野に雨ふりそめり色やまさらん

同

そみよまのきしの藤なみまゝ宿の松の木そゑに色なまさらん

千十一

いかにせんしのふの山の下紅葉しくるとまゝに色のまさるを

古二十

ちはやふるかもの社のゆふたききよろつ代ふとも色なりらし

拾五

新七

千早振ひら野の松のえたまけみ千代も八千代も色なりらし

同十七

とやかくるたかのを山の玉つはき霜をいふとも色なりらし

同七

青柳のいとのかたくなひくとも思ひそめけむ色なりらし

同十一

千とせふるをへの松は秋風にこゑこそかかれ色なりらし

同六帖二

秋かせにみたれてものいおもへとも萩の下葉の色なりらし

同六帖二

浅茅おふる野へや蒔らん山うつのかきはの草の色もあいらす

後十四

朝ごとに露のかけとも人こふるまかまとの葉の色もあいらす

同一

春雨にいかによ梅にほふらむと見るはたの色もあいらす
同六又六帖六

秋の海にうつれる月をたちかへり浪のあらへと色もあいらす
六帖一

春雨のいろかはるにやにほふらんとか見る梅の色もあいらす
同四

うゑて見る松と竹とそ君か代の千とせゆきふる色もあいらす
○

後五六帖一

空とはみ秋やよくらんひさかたの月のかつらの色もあいらぬ
新六六帖六

時雨ふるおとのそれとも吳竹のなとよととも色もあいらぬ
○

古二六帖六

春かきみたなひく山のさくら花うつろんとや色もあいらゆく

古十 物名

あきちから野のなりよけり白露のおける草葉も色もあいらゆく
○

千鳥なくさほの川きりたちぬらし山の木の葉の色もあいらゆく
拾三

まかふとも雲ともとかん高砂のをのへのさくら色もあいらゆく
代

まくれもる岩田のをのとはと原あさなくに色もあいらゆく
○

拾十七

名をきけり昔まなからの山なれとまくると頃の色もあいらけり
古十五

秋風のふくとふきぬる武藏野のなへてくさ葉の色もあいらけり
勅

人こころ木の葉ふりまなくえにしあれり涙の川も色もあいらけり

後七六帖六

何れをかききてしのはん秋の野にうつろはんぞて色かはる草

後

いまにてふ心つくはの山見れりこそ為よりこそ色かゝりけれ

同六

秋の野よいかなる露かおきつめて千々の草葉の色うつるらん

勅

秋のけふくれなぬくるたつた川ゆくせの浪も色うつるらん

拾十七

もみち葉の流るときに立田川ふちのみとりも色うつるらん

千

戀そめし人のかくあそつれなけれ我なみたしも色うつるらん

新十三

人まゝろうそはなそめのかり衣さてたにあらて色やうつらん

拾十三

秋の來ぬたつたの山をみてしかな時雨ぬさきに色やうつると

新十二

もらすなよ雲ぬる峰のはつまくれ木の葉の下に色うつるとも

古十七

咲そめし時よりのちのうちはへて世の春なれや色のつねなる

後二

限りなきなにかふ藤の花なれりそこひもまらぬ色のあざさか

拾十七

かのみゆる池へにたてるそら菊の志けみさえたの色にてこそさ

勅

我やとのうき糸の草のあさみとりふる春雨をいろのそめける

後二

たち渡るかそみのみうの山高み見ゆるさくらの色のひとつを

六帖一

ふるさといなは雨なれと神無月まくれよ山のいろのそめけり

新十六

からころも花のたもとにぬきうへて我こそ春の色にたちけれ

後拾一

梅の花香のことくに匂はねとうそくこくあそ色のさきけれ

千一

としの川きまの山吹さきぬれはそこにそあかき色の見おける

新七

あまなへて木のめも春の浅みとり松にそ千代の色の見おける

後二

あさほらけ下ゆく水のあさけれとあかくそ花の色に見おける

後二十

まひ人のまゝろに君のうつりなれあちの花とそ色の見たまし

拾十七

ふく風にもるものならぬ菊の花くもあなりとも色の見たまし

新

○ めのまへよ風もふきあへさうつりゆく心の花も色に見分けり

千十三

○ いかはより思ふとまりてつらからんほのれ涙の色を見せはや

新十七

○ おはよとの浦にたつ浪かへらすの松のほのらぬ色を見まじや

同十六

○ から衣たちかゝるへき春のよにいかてかはなの色を見るへき

同十八

○ 袖におく露をいつゆと志のへともなれゆく月や色をみそらん

後三

○ らつのまにちりはてぬらん櫻花おもひけにのみ色をみせつと

同五

○ まら露のうへのつれなくおきむつと萩の下葉の色をこそみれ

六帖

○ うつろふもうれしかりけり我爲にふかきま弓の色をみすれの

同六

○ 此川のわたる瀬もなしもみち葉の流れてふらた色をみそれの

千五

○ 君見んと思ひやしけんたつた姫もみちのにまら色をつくせり

勅

戀しさを人にいはいはてまのふ草しのふよあまる色をみよらし

月

をりつれの我とや松のおもふらんひまに紅葉の色をみんとり

同

何ことをしのふのをかの岩つゝまいのぬ思ひの色に出つらん

古十三六帖六

さとの葉におく初霜の夜をさむみしみいつくとも色に出めや

六帖六

人しれを戀にしぬともみそのふのからあるの花の色に出めや

新十一

あき萩のえたもとをよにおく露の今朝きぬぬとも色に出めや

同

むろこひのまきの下葉にもるまくれぬるとも袖の色に出めや

古十三

我戀をまのひら糸ていあしひきの山たちはなの色に出ぬへま

六帖六

かくはかり戀しむたらしくれなるの末つむ花の色に出ぬへま

拾十一六帖五

よそにのみ見てやの戀んくれなるの末つむ花の色にいてそり

同

いりてあひまらせそむへき人まれそおもふ心の色にいてそり

代

せきあへて岩まの水の草かくれおもひあまりて色にいつとも

古十一六帖五

人老れそおもへんくるしくれなるの末つむ花の色にいてなん

古十八

世の中をいとふ山への草木とやあなうのはなの色にいてなん

勅

くれなるの涙を袖にせきうけてけふそまのみの色にいてぬる

新十五

うちはへていやねらるゝ宮城のゝを萩の下葉色に出しより

六帖

ころみよおもひまものを秋山の初もみちはの色に出にけり

同五

つくまのにおふる紫きぬにそりいまたきなくに色に出にけり

古十三

戀しく下におもへむらさきの袷すりの衣色にいつなめめ

同

我まとや人もみるらんさくら花あくことまらぬ色にも有るな

古五六帖六

よのなの人の心の花そめのうつろひやそた色にそほりける

拾三十

墨染の衣と見れりよそなからもろともにきる色にそほりける

後拾十七

すむ人のかれゆく宿のとたむかき草木も秋の色にそほりける

六帖六

勅

○ 虫のねいあさちかもとに埋もれて秋の末葉の色にそぼりける

○ 時雨ゆく空たにあるをみち葉の秋にくれぬと色に見そらん

後五

○ 床夏よおもひそめての人あれそころのはとは色に見えなん

六帖六

○ 露霜の染まるといせる菊の花いつれおもとの色にありらん

千一

○ ひかしをりちらさぬ宿の梅の花とたるまろや色に見るらん

拾五

○ かつみつと千年の春のすくきともいつか花の色にあくへき

後拾二

○ 岩躑躅をりもてを見るせこかきしくれなぬ染の色にたれい

同十

○ ふかさこそ藤の袂のまざるらひなみたのあなし色にこそあめ

代

○ 久方のかつらのさとのからころもをりはへ月の色にうつなり

同

○ さら露のからくれなぬにうつるまてはる袂の色そかなあき

六帖

もろまきのあまたの袖に見えしよとどけて思ひの色を戀まき

代

ふる雪のまたよにはへるうめの花しのひに春の色を見分け

同

まら露と人はいへとも野へ見れのおく花ことに色そかはれる

同

春ふあぐたつねいるさの山のはにはのみし雲の色そのまれる

後三

白雲と見わつるものをさくら花けおちるとや色ことになる

古十四六帖六

おもふよりいふにせよとか秋風になひく淺茅の色ことになる

古十四

いて人のおとのみそよき月草のうつまこころの色ことにあて

同四

散ねともか糸てそ惜きもみち葉の今のかきりの色とみつれ

新六

木の葉ちる時雨やまらふ我袖にもろたなみたの色と見るまで

六帖六

菊のはなときもおときも今までに霜のおかきの色とみままや

同三

おせきにもさはらざりけり紅葉のおちくる水の色と見えつと

代

おもふともこふともまはし山城のときはの森の色もみねねり

古十二六帖六

君こふるなみたしなくのから衣むねのあたりの色もねなまし

後二

たち見たる霞のみか山たかみ見ゆるさくらの色もひとつを

同

さくら花いかてる人のをりて見ぬのちこそまされ色も出てめ

後拾二

藤の花をりてかさせりてむらさき我もとゆひの色やそふらん

六帖六

うちかへしみまくそはしき古里の大和なてまて色やかひるも

代

うつろへとかひらさりけり菊の花同まむかしの色にさくらん

勅

きえぬとも淺茅ううへの宿まあらひ猶思ひかく色やのこらん

代

ふる里にさうはまつみん梅の花むかしよとたる色やのこると

六帖

神無月ふたつある年の時雨にひきともときくそ色こりける

同四

いはひつと植たる宿の花なれのおもふかことそ色こりける

後二

一夜のみ経てしうへれの藤の花こるとけたる色見せんや

同十六

うちつけよ淋まくもあるか紅葉もぬしなき宿の色なりけり

代

雪かとしてよそに見つれいさくら花折てにたる色なりけり

同

春雨やなへてそむらんみ経とは紀山のみとりも色ふかく見ゆ

同

水上のまくれふるらまやま川の瀬々のもみちの色ふかく見ゆ

同

梅の花香にたにとはへはるたちてふるあま雪に色まらふなり

詞

我戀の逢そめてこそまさりけれまかまのかちの色ならねとも

勅

まのふ山水の葉まくるく下草にあらはれにけり露のいろいな

同

木枯のもみちふきしく庭のおもに露ものこさぬ秋のいろいな

新

まきをり峰の梢にうつりきてさかりひさしき秋のいろいな
時雨つとかれゆく野への花なれい霜のまかきに匂ふいろいな

新七

ときはなるきひの中山をしなへて千とせを松の深きいろな
同十六

はともなくさめぬる夢の内なれとその世にとたる花のいろな
同

櫻さくとほ山鳥のまたりをのなかくしひもあかぬいろな
代

まからきのと山のあられふりささひ荒ゆく頃の雲のいろな
同

雲井なる山のさくらを見渡せこのよにしらぬ花のいろな
月

まら菊のまた咲けるかとおとろけの霜の下にそ色のこれる
代

春の夜のかすめるそらの月かけはちりつむ花の色はまかひぬ

同

ふるはといなはあたなれと神無月まくれそ山の色のそめける

同

山里の秋こそふかくなりけりくるたひことに木の葉色つく

新

をそなからほやまともそも思へらし戀せぬ人の袖のいろな

六帖一

まことにしてかそらの山をみじたせの小松のえたに霞たなひく

同

ふゆそきてはるたちぬらま朝日さすかそかの山に霞たなひく

同

せなる手をまきもく山に此ゆふへ木のはるのきて霞たなひく

同

かけるふの夕さりくれのさと人のつゆおきかたに霞たなひく

同万

こらか名につけのよろしき朝妻のかたやまきしに霞たなひく

万

かきろひの夕さりくれはさつ人のゆつきあたけに霞たなひく

同

ひはりあかる春へとさへよなりぬれの都も見えを霞たなひく

新一六帖一万

ときいいま春になりぬとみゆきふるとほき山へに霞たなひく

新一

ほのくくと春こそ空に來にけらるあまのかくやま霞たなひく

代

ほのくくと明石のとより見わたせのやまと島根に霞たなひく

同

見わたせの峰の春日にゆきとえてあまたかはらに霞たなひく

金

あつさゆみ春のけまきになりけりいるさの山に霞たなひく

勅

み冬月はるし來ぬれのあをやきのかつらきやまに霞たなひく

新一

天の原ふしのけふりの春の色のかすみになひく春のほけほの

新一

さとなみやあふみのみやのみにて霞たな引宮木ひくらる

新一

風ませに雪のふりつとまるとかにあすみたな引春の來にけり

万 月

月よめいまた冬なりあかすかにあすみたな引春たちぬとあ
あつさ弓春のあるしやこれならんかそみたな引たかまとの山

後拾

山高みみやこの春を見渡せいたとひとむらのかすみなりけり

同

はるくと八重のあは路におくあみを棚引もの霞なりけり

同

春のくる道のしるへのみとしのと山よたな引かすみなりけり

代

みむろ山春のあけたる白ゆふの月にうつらあかすみなりけり

月

白雲の上より見えしあしのねを立へたつるのかすみなりけり

同

花ちらす風のつらさにおとらぬの梢をこむるかすみなりけり

續

山里のあさけのけふりたな引を春にまつたつかすみなりけり

後

山さくら見にゆくみちをへたつれ人の心をかすみなりける

千

花ゆゑにあらぬ山のなかりけりころのはるの霞ならねと

同

思ふことなくてや春をさこさましうき世へたつる霞なりせり

詞

ふるさとへ春めきにけりみよまのこみかき原の霞こめける

勅

そのほとと心あてにそ思ひやるおしみの里のかきみこめつと

續

たに川の音へたてまかねおきひの中山かきみこむれに

千一

けふるかとむろのや島をみしほとにやかても空のうす霞のな

拾七物名

万

山たかみ花のいろをも見るへきよにくとたちぬるはる霞のな
日をへつと都のとほくなりゆけとたちもおくれぬはる霞のな

勅

同

あはち島と渡るお糸やたとるらむ八重たちこむるゆふ霞のな
かつしかのむかしのまとの継橋をむそれすむたるはる霞のな

新七

高瀬さすむつたのよとのやなき原みとりも深くかすむ春のな

同一

みつゑほよかくれぬ磯の松の葉のみなくすくなくかすむ春哉

同八

おもへ君もえし烟りにまかひなて立おくれたる春のかきみを

月

昨日まで雪ふりつみし美芳野の春ましかはに今朝をかすめる

後拾一

あふ坂の關をや春もこぼつらんおとはの山今朝そかすめる

後拾三

五月雨のをやむけしきも見ぬ哉庭たつみのみ霞まさりけり

同九

見渡せぬ都やちかくなりぬらんすきぬる山のかすみへたてつ

同十

はれすこそあなしかりけれとりへ山立かへりつるけさの霞の

新八

あられなり我身のはてや朝みとりつひにの野への霞を思へり

千一

つれもなき人の心やあふ坂のせきちへたつるあそみなるらん

同

神垣や榊にのふるまめをまたいかにたなひくろそみなるらん

代

あほかまの浦に烟りは立らめと見えぬや春のかきみなるらん

はへ延

古今春

かすの野のむらなつみにや白妙の袖ふりはへて人のゆくらん

同十一

あけたては蟬のをりはへなきくらしよるの螢のもね社見たれ

同四

七夕よかしつる糸のうちはへてとしのをななく戀や見たらん

家隆卿集

吾妻路やとつなの橋もうちはへていくへる雪の下にくつらし

山家集春

新勅

つとまさく山の岩蔭夕はへてをくらはよその名のみなりけり

後ノ三

うちはへていくかとへぬる夏川の手引のいと五月雨のそら

打延

拾三

うちはへて春のさはかりのとけきを花の心やなにいそくらん

ナシナヘテナド云心也

あし引の山ほととぎすを折延ノ字はへてたれを勝るとねをのみそ鳴

はた

マタ ヲリラエテナド云心ナリ

後ノ九

から衣きて歸りにしさよすから哀れと思ふをうらむらんはた

万十五ノ四十五

命あらいあふとも有ん我ゆゑにはなだ思ひそいのちたにへん

拾ノ六

思ひ出もなき故郷の山なれとかくれゆくはたあわれなりけり

同十二

佗ぬれの今はた同じなにはなる身をつくまても逢んとぞ思ふ

同十六

春のをし郭公はたきかまほしかもひむつらふまつころゝな

同十八

もとまきに千年のといおはかれとけふの君はためつらしき哉

後拾ノ二

みちよへて成ける物をなとてかひもことしもはたなつけ初けむ

はもとの外のゝなの結

頼政集秋

くまもなき月やまはゆきをのか枝をかさしてたてる女郎花哉

同戀

命あらいもしあふこともありやとて「我なくさむる日か心ゝな

同雜

まことにやこかくれたりし山寺のいまの立出る月を見るゝな

にほひと香

古今

月夜にのそれども見えき梅の花かを尋ねてそあるへかりける
後ノ一

梅の花をれいこほれぬ我袖にほほひかうつせはべつとにせん
千一

るをるかのためせぬ春の梅の花ふきくる風やのとけあるらん
同六

山さとのかきねの梅の咲にけりかはありこそ春もにはりめ
二句おなじことをいれたる

方三ノ十二

足引の山のまつくにいもまつととれたちぬれぬ山のまつくに
同三上ノ十九

あらずけのまぬのはり原ゆくさくさ君こそ見らぬまぬのはり原
同四ノ六

風をたにこふるはともし風をたにこんとしまたの何うなけかん

同十二上七

ひとつまいいふたのここととこなるものこのひもとけといふたのこ
同十四上十五

かつしかのまのてこなをまこもかなむれによすてあまのてこなを
同三十九丁

にはたへあざてこあま今宵たにつまよじてせぬあざてこあま
同十四ノ下三十一

あすの川せくとありせりあまたよもぬてこまじとせくとありせり
同十九下ノ廿五

あめにはもいほつとなはあ万代にくにあらさんといほつとなはあ
同五ノ廿三

梅の花今さうりなりあもあどちかさまにしてな今さかりなり
二句切れたる

同
もみちはをさこそ嵐のはらあらめこの山もとも雨とふるなり

同

同

松にはふまささきのかつらちりにけり外山の秋の風すさふらん

万廿下三十七

はのくど春こそ空にきにけらし天のかく山かすみたなひく

此らし疑ノ詞ニ非ス

大君のつきてめつらしたかまどのぬへ見ることねのみ泣ゆ

泣レハト也

後拾ノ十二

あすならいじすらるゝ身に成ぬへしけふを過さぬ命ともかな

頼政

藤波もみきはによそるおとすなりかゝれる松に風やふくらむ

新古十六

ふけにける我身のうけを思ふにも遙かに月のうたふきにけり

新古十三

はかなくもあけにける哉朝露のおきての後そきねまさりける

へき

新千載

ときしあれハ谷よりいつる鶯に世をたすくへき人をとハとや

新葉

つかふへき人やのこると山ふらみ松のとさしも猶そたつねん

新後拾

十年ゆまり世をたすくへき名ハあり又民をし救ふ人ともなし

續拾遺

年たけて思ひもよらす君の代にまたつかふへき道のありとハ

詞花

君か代の久しかるへきためしにや神もうゑけむそみよしの松

夫木

としをへて生そふ竹の園のうちにつきせさるへき君のみ代哉

新古

身にかへて花も惜まゑ君の代にみるへき春のかきりなけれハ

玉葉

同 千々の春をろつ秋になからへて月と花とひきみを見るへき

新葉 みるからにおつる涙の玉くしけみにつたふへきかたみ也けり

常山紀談 巡り逢んだのみあるへき君か代に獨り老ぬる身をいかにせん

万十三上ノ三十七 かのちよりかるきになして武士の道にふへき道志なけれの
とや

後ノ五 君のてす我のゆゑなみ立波のまぐくくをひしかくてこしとや

古ノ十六 雨ふりて水まさりけり天の川こよひのをにこひんとや見し
ぬるのな ちりふりなどはちりぬるふりぬるといひてちりつるふりつる
とはいはせ

朝露のおくてのいなはかりそめようき世の中をおもひぬる哉

同十七

蟬のはのよるの衣のうそけれとうつりかまくもにほひぬる哉

後十三

かつらきやくめちに渡す岩橋のなかくにてもふへりぬる哉

同十五

人のおやの心みやみにあらねとも子を思ふ道にまをひぬる哉

土佐

都にて君にあんと來しものをこそかひもなく別れぬる哉

ぬらん ぬハタ。不ノ意モアリ

新古ノ八

小山田にひぐさめ繩にうちはへて朽やまぬらん五月雨のまる

同

ひら雲や鴈のはらせにはれぬらんまゑきく空にそめる月うけ

同

なか月もいく有明になりぬらんあさちの月のいとささひゆく

見ふ

古

みやこ人いかにとこはと山高みはれぬ雲むに見ふとこたへよ

同

見くらんに問人あらぬすまの浦にもしほたれつとわふと答よ

かつふや

古

うつせみの世にも似たるを櫻花さくを見ままにかつ散にけり

新古

うつてほりうつにくたくる山川の岩たにむすふあかつきの聲

同

暮ぬまの身をは思ひて人の世の哀れをまるとかつのはかなき

かと

古

つひにゆく道とのか糸で聞しかと昨日けふとの思ひさりしを

新葉

をくるまの別れのあまたなれしかとこの曉をやるうたもなし

新

命をはあたなる物と聞まかどつらきかためになかくも有るな

同

引のへて野へのけしきのみえしかと昔をこふる松のなかりき

同

思ひあらぬ露の袂よまかふかと秋のはしめをたれにとりまし

新葉

吾妻路にゆきかふ身とのなりまかとまらすと君に逢坂のせだ

かとも

新古

花にあかぬ歎のいつもせしかともけふの今宵に似る時になし

同

夏草のかりそめにとておしゝとも難波の浦にあきそくれぬる

かるも 枯物ノ意ナルヘシ

夫木

ふる雪のゐなのふし原埋れてかるもかくへきかたやなうらむ
新葉

みなとこす汝風さむしゐるもかくゐなのは山の雪のあけはの

かなしハ善ニモ惡ニモ云

万十五ノ四十一

ちりひちの數にもあらぬれゆ^{ナルニノ意}思ひ^{愛スル意}とあらん妹^{かなし}

同十九ノ三十

春の野に霞たなひくうらかなまこの夕うけにうくひすなくも

新古

水くきの岡のくすはもいろつきてけさうらかなし秋の初かせ

同

身にとまる思ひを萩のうはよにてこのころかなし夕くれの空
上の句より受て次の句へ續きたる

後拾ノ十二

世の中にあらはそ人のつらからんと思ふにしもそ物の悲しき

同十六

長しとて明すやいあらん秋のよしまてのしまきのと^いからをたに

千六

木の葉ちるとい^いりきとてやみなまおもらて時雨の山巡りせ^い

新古ノ十五

見そらんと思ふ心のうたかひにありまよりけに物そかなし^い

たらちめ 垂乳根母ノ枕詞

後ノ十七

たらちめ^{垂乳母}のうたれとてまも^いうは玉のわか黒髪をなてすや有けん

拾ノ十四

たらちねの親のかまこのまゆこもりいふせくも有か妹にありて

同

たらちねの親のいさめまうたと糸の物思ふ時のわざにと有ける

後拾ノ十九

垂乳根のはかなくて社やみにしかこひいつことて立とまるらん
金ノ十

同 たらちめのなけきを積て我のかく思ひの下になるそかなしき

同 たらち糸の黒髪なからいかなれこの眉老るき人となるらん

古ノ十一

つるのな

アリト云言葉ノ下ハ必ス有ツルトノミイヒテ有ヌルト云コトナシ
見ル聞モ見ツル聞ツルトイヒテ見ヌル聞ヌルトハイハス

同 つれもなき人をこふとて山彦の答へするまでなけきつるのな

同 小夜ふけて天のと渡る月あけにあかすも君をあひ見つるのな

同 まくらよりまた老る人もなき戀を涙せきあへす洩しつるのな

同 見たつみの我身こす波たち歸りあまのすむてふ怨みつるのな

同十四

今こんといひしかりに長月の有明の月をまちいてつるのな

古十七

とりとむる物にしあらねの年月をあわれあなうと過まつるのな

後ノ三

ちるとのうきも忘れて哀れてふことをさくらに宿しつるのな

同四

ふた聲ときくどいなしに時鳥夜ふかくめをもさまたつるのな

同

逢とみし夢にならひて夏のよのくれかたきをも歎きつるのな

同十二

みるもなくめもなき海の濱に出てかへるくも怨みつるのな

同十三

うたゝ糸の夢はかりなるあふとを秋のよすから思ひつるのな

まつはたに思亂れて秋のよのあくるもしらすなけきつるゝな

同 數ならぬ身の山のはよあらねとも多くの月をすくしつるゝな

同十四 數ならぬ人そみの江の岸に出てなにはのかたをうらみつるゝな

同十五 へたてける人の心のうきはしをあやうき迄もふみとつるゝな

同十七 あすか川我身ひとつの淵瀬ゆゑなへての世をもうらみつるゝな

同 植しとき契りやまけんたけくまの松をふたとひ逢見つるゝな

同十八 峯高きゆきてもみへき紅葉をむかぬなからもかさしつるゝな

同十九 をしと思ふ心なくて此度のゆくうまに鞭をおほせつるゝな

同二十

万世の霜にもかれぬまら菊をうしろやそくもかさしつるゝな
コ、ロ、モ、ト、ナ、カ、ラ、ヌ、心、也

万十ノ三十三 風にちる花たちはなを袖ようけて君かみためと思ひつるゝな
つるゝも

同十一上十八 水の上にかすかく如き我いのち妹にあのんとうけひつるゝも

同十一上三十七 かけつはた枕詞につらふ君をいさよめと思出つくなけきつるゝも
カリソメノ歌

同四十二 たそかれとどいゝ答へんすへをなみ君かつかひを返しつるゝも

同十一ノ下三 まゆねかきまたいふかしみおもへるに古へ人を逢見つるゝも

同廿六 水鳥のかものそむ池のまたひなみいふせき君をけふ見つるゝも

万十二上ノ六

我せを今かくとまぢをるによのふけぬれの歎きつるものも

同十 さよふけて妹をもひてと老きたへの枕もそよに歎きつるものも

同十一 あしたいにて夕のきまます君ゆゑよゆとしくも己の歎きつるものも

同十二ノ下廿九 白妙の袖の更かれのをしけとも思ひみたれてゆるしつるものも

万十四上十一 足柄のみ坂かしてみくもりよのあかしたはへをこちてけるものも

万十六ノ三十三 いきしにのふたつの海を厭はしみ潮干の山を去ぬひつるものも

同十七上四 昨日こそ船出のせしかいさなとりひちきの灘をけふみつるものも

同十八ノ四十

みまくほり思ふなへにかつらうけかくはし君を逢見つるものも

同十九上二十 山吹の花とりもちてつれもなくかれにし妹を去ぬひつるものも

千 つくくと思へん悲しいつまでか人の哀れをよふまきくへき

新古 たらち糸のいさめし物をつくくと詠むるをたにとお人のなき

後ノ一 きて見へき人もあらしな我やとの梅のはつ花をりつくしてん

同三 更の宿のかけともたのむ藤の花たちよりくとも波にをらるるな

万十二上ノ十一 世の中の人の言葉を所念英おもほすなまことを戀しあひぬひをおふみ

ナア○ヌノハタラキタルアリ○無ノ意○テクレナ勿ノ意○テクレナ下ニソトウ
ナ
テタル五通

つくくと思へん
マタキ井タルヤウ物ヲ観念シテ居タル体也

ヲラレトナト云心

同三十一

港入のあしむけを船さはりあほみ今來ん我をよとむともふな

同十二下ノ三

妹のかともきすきかねて草むそふ風ふきとくな又かへりみん

同十八

雨もふり夜もふけにけり今更に君ゆるめやもひもときまけな

同廿九

老ろたへの君の下紐むれさへよけふ結ひてなあらんひのため

同三十

朝霞たなひく山を越ていなひれりこひんなあらんひまで

後ノ十四

よの中になを有明の月なくてやみにまとおをとりのぬつらしな

同四

夕禊かけてもいふ^{ナア}なあた人のあふひてふ名のみそきにそせし

同

同七

ふたはより我老めゆひしなてしてこの花の盛りを人にをらさな^{ナア}

同十

冬の池にすむ鴉とりのつれもなし下よかよらん人に老らすな

同十二

濱千鳥たのむをしれとふみそむる跡うち^{ケスナト也}けつなわれをこそ波

同十三

關まえてあはつの杜のあひそとも清水に見ゆし影をわするな

同

思ふてふ言の葉いふになつか老な後うき物とおもひすもあな

同十四

人ことの頼みかたさの浪華なる芦のうらはのうらみつへしな

同十五

あし引の山におひたる老らかしの老らしな人を朽木なりとも

同

同

万十四上三十三

万十四上三十三

同十四ノ下

同十四ノ下

後ノ十六

同十七

同十八

同十九

ぬにしへも契りてけりな打はふきとひたちぬへきあまのは衣

ありぬとて思ひもすてしから衣よそへてあやな怨みもそする

そのとねのはゆまうまやのつとみぬの水をたまへな妹のたこてよ

内日さす宮のむかせのやまとめのひさまくとにむをわそらすな

ならのはの葉守の神のましけるをまらてそ折したとりなさるな

みな人におみとせけりなみな瀬川そのわたり社まつい浅けれ

われも思ふ人もわするなありそ海の浦ふく風のやむ時もなく

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

同

うちすてと君かいなはの露の身のきぬぬはかりそ有と頼むな

いまのとてたちかへりゆく古里のふはのせきやに都むするな

むそれととにむすひて別るれはあひ見ん迄の思ひみたるな

春のなほわれにてまらぬ花さかり心のとけきひとのあらしな

足引の山かくれなるさくらはなちりのこれりと風にまらすな

くちなしの色をそたのむ女郎花はなにめてつと人にかたるな

あきの野の花の名たてに女郎花かりにのみてん人にをらるな

とほしあれの一日一夜も思ひめてあるらん物とおもほしめすな

拾ノ十六

こちあかはにはひおこせよ梅の花あるしなまとして春を忘るな

同

花の色いあかそ見るらん鶯のねくらのえたにチナフレント云手なとふれそも

万十九上ノ廿

時鳥きけともあかすあみとりにとりてなつけケンなかれそ設テ待詞鳴るね

同下ノ五

この雪のけのこる時よいさゆかなンやま立花のみのてるもみむ

同十五

君あいへにうゑたる萩の初花ををりてかさンな旅ニかるとち

同廿上六

高まとのを花ふきこす秋風にひもとときあけンなたンならずとも

後拾ノ三

きのはキカマホシキやなそのかみ山の郭公ありしむらンしのおなしてあかと

なほさりよ 仮初ニナト云心

新葉

うつろはん後志のへとやなほさりにあらぬ心の色を見せけん

後七

なほさりに秋の山路を越くれンをらぬにし花をきぬ人そなき

千ノ十七

なほさりにかへる袂ニかはらねと心はンありそそみそめのそて

なるのな

後ノ十二

もらみ川深きにもほへンそいなふねの心かるくもかへるなる哉

拾ノ四

夜を寒みねさめてきけニを去鳥のうらやま敷もみ水馴なるなる哉

同

池みつにまほりとくらんあしかもの夜深く聲のさはくなる哉

同五

大空にむれゐるたつニのさしなンら思ふところのありけなる哉

同十六

春日野のをきのやけ原あさるとも見ぬぬなき名をおほす仰せ給へトナリなる哉

なほくナマナカ

新古

きかてたとねなましものを時鳥なほくなりや夜はの一まゑ

同

なほくナマナカに消ひきえなて埋火のいきてかひなき世にもある哉

同

かたみとてみれいなききの深み艸になほくの匂ひなるらん

同

とすらるれまつとる告そなほくにいなりの山のみ絲の秋風

同

なほくナマナカ物思ひ初てぬぬるよのはかなき夢もぬや見ぬける

新葉

めくりあふ契りならそいなほくにうきを見果ぬ命ともいな

詠る

後拾ノ四

おきあかしみつとなほひる萩の上の露ふきみたる秋のよの風

同

淋まさにやとを立出てなほひれいゆつくもおなし秋の夕くれ

同五

秋いたとけふはかりとそ詠むれい夕くれにさへなりにける哉

同

よもすうら詠めてたにもなくさまん明て見るへき秋の空のい

同六

春やくる人やとふともまたれけりけさ山さとの雪をなかめて

同九

なかむらんあかまの浦のけしきにて都のつきを空にまらなん

同

今のとてとひとあるめる村鳥のふるすにひとりなかむへき哉

同十四

涙こそあふみの海と也よけれみるめなきてふなかめせしまに

同十五

もろともにならめし人も我もなき宿にひとり月やすむらん

同

今のたゞ雲井の月を詠めつとめぐりあふへきほどもあられそ

同

詠むれり月かたふきぬあられりか月見ぬ君か名こそをしけれ

拾ノ十

なつさはまし泥ミ障ル義

同十六

みてくらにならまし物をすへ神のみてにとられてなつさはましを馴ムツレ也

後拾二

雪をうさみ垣ねにつめるヨキ菜也からなつなナレツハマホシキト云なつさはまくのほしき君哉

後拾二

ときもあは紅そめの色と見てなつさはれぬるいはつとしうなナレツフコロナリ

なしよマア

古

とくむへき物といなしにはかなくもちる花ことにたくふ心の

同

ほととぎそ我といなしにうの花のうき世の中になき渡るらん

万

みよまのゝ青ねる峰の昔むえろ誰かありけんたてぬきなしに

うちつけにニハカニ

後ノ十七

梅のえにふりおける雪を春ちのみめ目ノサシアタリニのうちつけに花と社みれ

後拾ノ四

うちつけに袂をサシアタリニとしくおほゆる衣にあきれたたるなりけり

うたかた 未必

万十七上ノ廿一

天さかる鄙にある我をうたかたも覆立ニテトク消レモノナレバシバシモト云意ナリ紐もときさけておもほすらめや

同三十

うくひすのきなく山吹ハカナキ意ニテシバシモノ意うたゐたも君ミコのてふれす花ちらめやも

うたて 奇偉

拾ノ十二

みる月のさやかに見えそ雲かくれみまくそほしきうたて此頃

後拾ノ九

さもこそサコソノ意その都の外よやとりせめうたて露けきくさまくらミのな

金ノ九

鶯のゐる松原いかにさはくらむ米ノ精あけのうたて里とよみけり

うしろめたき 後目痛

拾ノ一

朝速キまたきおきてそみつる梅の花よのまに風心モトナキ也のうしろめたきに

同三

もみちはを手毎にをりてかへりなん風心の心もうしろめたきに

後拾ノ一

同四

春のうちいちらぬ櫻とみてし哉サさてもや風のうしろめたきと

のともまりたる

古

ふきまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のこころの

好忠

野飼せし駒の春をり求りしにつきそもある哉「よとのまこもの

榮花

とくとたよ見ぬすもある哉「冬フユのよのかたしく袖にむき氷の

源螢

あらはれていと淺くもみゆる哉「あやめもわかすなうれけるねの

おなじことを二ついれたる

千ノ十六

淋シまさに哀アハレもいとこまざりけりひとりそ月の見るへかりける

万十三上ノ九

いつはなも戀そ有とのあらねともうたて此ころ戀のまけきに
ナント云ニ同シ

同十七

いけるよま戀とおものをあひ見ねの戀の中にも我そくるしき

同十九

戀といへはうすきとなり然れとも我の世されし戀のまぬとも

同廿二

あら玉のとし月かねてぬは玉のいめにそ見ゆる君のすかたの

同廿三

かくのみに有ける君をきぬならばまたにもきんと我もへりける

同三十

玉かつら掛ぬときなくこふれともいかにそ妹にあふ時もなき

後ノ五

けふよりの天の河原はあせなとんこそおともなくたゞ渡りなん

同六

時雨ふりふりなの人に見せもあへすちりなは惜みをれる秋萩

万十三上ノ廿九

我ころやくも我なりはしきやし君にこふるも我ころから

後ノ十四

世の中のうきはなへてもなかりけりたのむ限を恨みられける

万十四上三二十六

笠懸のあぬくなゆのんはりしみちあぬくのゆのそてあらくさ立ぬ

同三十七

をくさをとをくさ管をとまは船の並へて見れのをくさ勝めり

後ノ十八

朝ことよ見む都路のたえぬれのことあやまりにとふ人もなし

同二十

またまらぬ人もありけり東路にむれも行てそすむへかりける

同

あすのらの若菜つまんと片岡のあしたの原のけふそやくめる

万十五ノ三十八

同十六ノ十五

同二十

同十六ノ三十一

同十六ノ三十九

拾ノ八

拾ノ十二

同十四

玉の袖の袂とほりてぬれぬとも戀わされかひとらすのゆかし

かくのみよありけるものを猪名川の沖を深めてわらもへりける

志ら玉のをたえにしきと聞しゆゑに其をまたぬき我玉にせん

ほうしらか鬚刺杭馬のそりくひうまつなきいたくな引そほうしなからんナガラニナラント也

つぬ島のせとの玉のめり人のむたあらかり志のとわかむたの玉のめ

川の瀬のうつまく見れぬ玉もかるちりみたれたる川の船のも

思ふらん心のうちをたぬ身ぬ計りにもほらしとそ思ふ

みる夢のうつくになるは世の常そうつくに夢になるを悲しむ

かた山にはたやくおのこかのみゆるみ山櫻のよきてはたやけ

玉しを君のくいていふほりえよの玉しきみてく月そかまのん

我のみやこもたるてへの高砂のおのへにたてる松もこもたり

我せこをまふるも苦しいとまあらぬ拾ひてゆかん戀をされ貝

さくら花のとけりけりなき人をまふる涙をまつのおちける

いにしへのちるとや人の惜みけん花こそ今のむかまふらし

こゝにたにつれ徒然なく郭公ましてこゝぬのもりのいにそ古今井杜伊豆也

同

年ふれいかなる人うとこふりてあひ思ふ人に別れさるらん

床古

同

いも山の岩ねにおける里れをうもあらずて妹のまぢ乍あらん

後拾ノ一

摘にくる人のたれともなかりけり我あめしのと若菜なれとも

万十九下ノ七

なてしてこの秋さくものを君か家のゆきの巖よさけりけるうも

同廿上ノ五

あしひきのやまにゆきけん山人のこころもあらず山人やたれ

同八

山吹は撫つゝおはさん有つゝも君きましつゝかさしたりけり

同下ノ七

コバミ障ハルニ不堪ト云意
さへなへぬみとにあれいあなし妹か手枕はなれあやにかなしも

同廿下ノ廿八

さく花のうつろふ時あり足引の山すかのねしなかくは有けり

同三十五

君の家の池のあら波いそによせまはくみともあかぬ君のな

後拾ノ九

夢見ととなけきし人をはともなく又我ゆめよみぬそかなし

同

そてはてんと思ふさへ社悲まけれ君になれにし我身とおもへり

同十一

あふまてとせめていのちの惜けれ戀こそ人のいのち也けれ

同十二

こえにける波をいあら末の松千代まてとのみたのみける哉

千ノ十五

いにあへもこぬみてしあふ坂の踏たうあへき中の道うり

新古ノ五

ものおもふ袖をり露やならひけん秋風ふけいたぬものとい

古十一

おもふに忍ぶるとそまけにける色にハ出しとおもひし物を
万十一上ノ廿九

君こそはかたみにせんと見ゆふたり植志松の木君をまちて糸

同廿六

玉もかるいての志からみうすきカハノ意かも戀のよとめるわの心哉ノ意かも

同三十

大海にたつらん波のあひたあらん君よこふらしやむ時もなし
古ノ十九誹諧

思へとも思ひそとのみゆふなれいなや思ひし思ふひなし
後ノ三

折つれいたふさにけゆるたて乍らみよのほとけに花たてまつる
万十二ノ上五

妹にこひい糸ぬほしたに吹風し妹にふれなり我むたにふれぬ
や用言より請たる

万十二上ノ二十四

我妹子ヨシコやあをむすらすないそのみ袖ふる川のたえんともへや
後ノ七

紅葉はを時雨もつらしまれにきて歸らん人をフリトメヌカハシグレヨカンふりやととめぬ
後拾ノ三

やへ茂るむくらの門のいふせきにささ助字すや何をたたく水鶏を
や 体言より請たる

後十二

うちあへし見まくそは志紀古郷のやまと撫子いろやかひれる
万十二上ノ廿八

梓弓ひきてゆるへぬまそらをニシテヤやこひとふ物を志ぬひのねてん
拾ノ八

としことに絶ぬ涙やつもりつといとふらくや身を惜むらん
や てにをばより請たる

後ノ十五

言の葉に絶せぬ露のおくらんや昔しおほゆるまとひしたれの
万十二下ノ十二

おのれ故のらへてをれの茸毛馬のおもたうふたにのりて久しや
同ノ廿三

玉かつまあへしま山の夕露またひねのえぞやなエセンヤノ意かきこのよを
拾ノ十一

見れこそや見ぬ人こそある病ひそれあふひならてりやむ薬なし

後拾ノ九

やうてッノマーテスグニト云意

轉寢のこのよのゆめのはかなきにさめぬやうての命ともうな
拾ノ七

白露のかよるかやうてきぬさらの草葉そ玉のくしけならまし
金ノ十

のりの爲になふ薪にとよせてやうてうき世をこりそはてぬる
詞四

山おかみやく炭籠のけふりこそやうてゆきけの雲となりけれ
同七

かくとたよいはてはかなく戀志其儘モトノ心ナリなりやかてあらぬ身とや成なん
同十

をりくのつらさを何に歎きけんやうてなき世もあれの有けり
千一

烟かとむろのやまを見しほとにやうても空のかきみぬる哉
同六

時雨つるまやの軒端のほとなきにやうてさし出る月の影かな
同

峰こねにならの葉つたひ音つれてやうて軒はに時雨きにけり
同七

たのむれと心かはりてかへりこね是そやうての別れなるへき
同十三

見ま夢のさめぬやうてのうつらにて今日とたのめし暮をまたりや

同

ひと夜とて夜かれし床のさ庭にやかてもちりのつもりぬる哉

同十九

てる月の心の水にすみぬれりやかてこの身にひかりをそます

同

清くすむ心のそこをかこみにてやかてもうつる色もさうたも

山家ノ春

やさし 恥シキ心

柴の庵によるく梅の匂ひきてやさしきかたもあるすまぬ哉

同戀

弓張の月にはつれてみし影のやさしうりしいつのまにそれむ

万

その中をうしとやさしと思へとも飛立かねつ鳥にしあらぬの

活ノ十九誹諧

何をして身のいたつらに老ぬらん年のおもいんとそやさしき

ハヅカシキ也

万ノ松浦仙力歌

玉島のこの川上よ家のあれと君をやさしみあらぬさそありき

ハヅカシキ也

後十六

まとひ、まとふ感

あはぬまよ戀しき道もしりにしをなとうれしきにまとふ心を

古ノ十二

我戀のまらぬ山路にあらなくにまとふころそ侘しうりける

後ノ二

かへるかり雲ちにまとふ聲すなりをさみふきとけまのめ春風

同九

ゆきやらぬゆめちにまとふ袂にのあまつ空なき露そおきける

同十

うつゝにてたれ契りけん定めなき夢路にまとふ我の思れり

ワレニモ非メト也

同十三

夏虫のゑるくまとふ思ひをはこりぬかなしと誰か見さらん

同十七

歸りくる道にそけさのまとふらん是になぞらふ花なきものを

同十八

おもひやる方もあられそくるしきの心まとひの常にや有らん

拾ノ十六

おほつかなくらまの山の道あらて霞のうちよまとおけふのな

まよふ

後ノ六

女郎花くさむら毎にむれたつたれまつむしの聲にまよふそ

壬三集

はかなくもよもきの宿に迷ふかな野にも山にも道のある世に

新葉

おもひいる心ひとつにまよふな野にも山にもあらぬ戀路を

同

夏の中やへたつ雲にへたてきてかとお心やみちまよふらん

同

おもひの縁いりに志山を立出てまよふうき世もたゞ君のため

續千十

たつ縁いる道こそ今もかたうらめ迷ふをさそとある人のなき

風雅

子をおもふところや雪にまよふらん山の奥のみ夢にみえつゝ

古ノ十五

おきまよふ野風をさむみ秋萩のうつりもゆくか人のまよふの

後ノ十四

濁りゆく水に影の見ゆる社あしまよふねをととめても見ぬ

同十七

道あらぬものならなくよあし引の山おみまよふ人もありけり

同

あらかしの雪もきぬぬるあし引の山路をたれらふみ迷ふへき

まくりて 懸手也

後拾ノ四

袖ふれの露こはれけり秋の野のまくりにこそ行へかりける

同 風越のみねをりおるまつのをのきその麻衣まくりにして

けりとかな

拾二十

うきなから消せぬ物の身なりけりうらやましき水の沫かな
古ノ十七

止めあへすうへもとしといいはれ是もかもつれなく過る齡か+

同二

空蟬の世にも似たるかさくら花咲とみしまにかつちりにけり
同十六

うちつけに淋しくもあるか紅葉もぬしなき宿の色なりけり

新勅ノ十六

はのかにものきはの梅のにはふかな鄰を去めて春の死にけり

拾ノ十二

春くれの柳のいともとけにけりむきはとれたる我こころかな

けりとかな

古十

花の木にあらさらめとも咲にけりふりにしてのはある時もかな
赤染衛門集

都いてとけふことぬかに成にけりとうらの國に至りよしかな
後十

あふみちをしるへなくともみてしかな關のこなたは佗しあり是

けるとかな

千十一

思ふよりいつしかぬると袂かななみたそ戀のゑるへなりける
後ノ十七

すへらきもあら人神もなまむまてなきける森のはとときす哉

けりな

新古

春といへんのそみよけりな昨日まで浪まに見ゆしあはち島山

同

あかなくにちりにし花の色々のこりにけりな君もたもとに

同

玉かしの茂りにけりな五月雨に葉もりの神の志めはふるまで

同

冬をあさみまたき時雨とおもひしをたえさりけりな老の涙も

同

けらしな

冬深くなりけらしな難波江の青葉まゑらぬあしのむらたち

古十五

けるあな

久しくも成にけるあな住の江のまつりくるしき物にそ有ける

同十六

夢とまそいふへかりけれ世の中にうつとある物と思ひける哉

同

君のうゑゑ一むら薄むしのねの志けたのへとも成にけるあな

同十七

をしてるやなにはのみつにやく鹽のからくも我の老にける哉

同

白雪のやへふりしけるかへる山あへるくもあひにけるあな

同十九

君の代よあふさか山の岩清水こかくれたりとおもひけるあな

後ノ三

君こそて年にくれにき立ちへり春さへけふになりけるあな

同

をしめとも春のかきりのけふのまた夕暮にさへなりにける哉

土佐

浪とのみひとつにきけと色みれの雪と花とにまらひけるあな

後ノ四

花もちりほととぎそさへいぬるまで君にもゆかす成にける哉

同九

月日をも數へけるかな君こふるかすをもしらぬ我身なりけり

同十

かよりける人の心をまら露のおけるものともたのみけるかな

同

高さこの峰のまら雲かよりける人のところをたのみけるかな

同

諸共にをるともなしに打とけて見えにけるかなあさかほの花

同十三

なひくかたありける物をなよ竹のよにへぬものと思ひける哉

同

駒にこそまかせたりけれあやなくも心のくると思ひけるかな

同十四

さしてこと思ひしものを三笠山かひなく雨のもり_にけるかな

同十五

ひきうゑし人のむへこそ老にけれ松のこたかく成にけるかな

同十七

としふれの我くるかみも白川のみつ老人ノカガマリオル良ひくむまで老よけるかな

同十八

數ならぬ身のみ物憂くおもはへてまたると迄も成にけるかな

同十九

人ことよけふくとのみこひらると都ちかくもなりにける哉

けるかも

万十下十四

秋萩の枝もとをくに露しもおきさむくも時なり_にけるかな

同二十六

秋のぬのをはなかうれの打なひき心のいもにより_にけるかな

同三十三

同四十三丁 萩のはなさけるみれの君にあはそまことも久に成にけるるも

同十一ノ十二 妹か爲はつえの梅をたをるといまつねの露にぬれにけるるも

同十七丁 ゆけとゆけとあぬ妹ゆゑ久方のあめの露霜に濡にけるるも

同三十二 この川の瀬々のまきなみまぐくに妹か心にのりにけるるも

同 大舟 紫 おほふねよあしにかりつみまみまにも妹か心にのりにけるるも

同十二ノ上四 同 路紀伊也 はおまちに引ふねまたしたくのりに妹か心にのりにけるるも

同十七 にひはりのいまつくる道のさやかにも聞にけるかも妹かうへのを

くやしくも老にけるかも我脊子かるとむるおもにゆかまじ物を

同二十七

同十二下ノ廿六 吾妹子にゑるといなしにありそまに我衣手のぬれにけるるも

同廿八 ひろの浦のせとのさきなるなる島の磯こそ波に濡にけるるも

同十三上廿七 いさりする蟹のかちおとゆくらかよ妹か心にのりにけるるも

同十五ノ八 あそか川瀬々のたまものうちなひき心の妹によりにけるるも

同三十六 はなれそにたてるむろの木^{アヤウキ意}うたかたも久まき時を過にけるるも

同二十七 たかしきのうへかた山の紅のやまはのいろになりけるるも

同三十九 大君のとはのみかと思へれとけなかくしあれの戀にけるるも